

令和五年（二〇二三）三月二十五日発行  
『大倉山論集』第六十九輯抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

## 田辺尚雄の「日本文化講義」

—日本音楽の真髓を伝えるための巡講—

上久保敏

# 田辺尚雄の「日本文化講義」

—日本音楽の真髓を伝えるための巡講—

上久保 敏

## 目次

はじめに

一 日本文化講義とその実施要請に対する高等教育機関の反応

二 日本精神と田辺尚雄の日本音楽論

(一) 日本精神論の流行

(二) 田辺による日本精神論的音楽論の展開

(三) 日本精神論の諸類型から見た田辺の日本音楽論の位置づけ

三 田辺尚雄が担当した日本文化講義

(一) 日本文化講義の講師選定の背景—田辺と文部当局との関係

(二) 田辺担当の日本文化講義の一覧とその分類

(三) 実施事例資料に見る田辺の日本文化講義

(四) 田辺の日本文化講義における日本精神と雅楽

(五) 田辺の日本文化講義に対する学生・生徒の反応

(二) 日本文化講義に関する回想

#### 四 田辺尚雄にとつての日本文化講義

おわりに

(一) 『日本音楽概説』の刊行―日本文化講義の欠を補

附録 田辺尚雄の日本文化講義の速記録

う書

### はじめに

日本音楽や東洋音楽の開拓的研究者として知られ、昭和五十六（一九八一）年には文化功労者に顕彰された田辺尚雄が百年に及ぶ生涯を終えたのは昭和五十九年三月である。令和元（二〇一九）年一月に刊行された鈴木聖子『雅楽』の誕生 田辺尚雄が見た大東亜の響き』により田辺の雅楽に対する思考の変遷や田辺による日本音楽史の構築の過程が明らかになったが、著書、論文、講演録、随想など膨大な著作を残し日本の音楽研究を長きにわたり牽引した田辺を対象とした本格的な研究はこれまでのところ同書一冊にとどまっております、没後四十年近くが経過した今でもなお田辺に関する研究は十分に行われているとは言えないのが実情である。<sup>②</sup>

一方、戦時期の教学刷新事業として昭和十一年度より文部省直轄諸学校のみならず私立の大学・高等学校・専門学校で実施された「日本文化講義」は文部当局作成の資料で把握できる昭和十一〜十六年度における文部省直轄諸学校での実施分だけをとっても五百二十一人に上る学者、文化人、実業家が講義担当者として動員された教学刷新に関する一大事業でありながら日本近現代史や日本教育史において十分に顧みられることなく今日に至っている。<sup>①</sup>

田辺は特定の大学に専任として籍を置く研究者ではなかったものの、文部省直轄諸学校で実施された日本文化講義を昭和十一〜十六年度に二十八回担当していた。この間に日本文化講義を二十回以上担当した人物は十六名に限られ、担当回数多きで田辺は五百二十一人中第七位であり、音楽に関する日本文化講義は田辺一人が担っていたと言ってもよい状況であった。<sup>(6)</sup>

本稿では田辺尚雄の戦時期の著作を中心に日本精神論という視点から田辺の日本音楽論の展開を辿るとともにその位置づけを考えてみる。その上で田辺が戦時期に高等教育機関で行った日本文化講義について実施事例資料に当たりつつ内容の考察を行い、田辺が日本文化講義に対しどのように向き合っていたかを明らかにしたい。

## 一 日本文化講義とその実施要請に対する高等教育機関の反応

「日本文化講義」は昭和十一（一九三六）年七月二十二日付けの「発思八七号」通牒で文部省思想局が帝国大学、官立大学、官立の高等学校、専門学校、実業専門学校などの直轄諸学校に実施を要請し、私立の大学・高等学校・専門学校に対しても実施を慫慂した思想善導講義である。日本文化講義は「日本文化（研究）教官講習会」、「日本諸学振興委員会による学会の開催」、「『国体の本義』の編纂」などとともに戦時期の教学刷新事業の一つであり、<sup>(8)</sup>その目的は学生・生徒に対して国民的性格の涵養や日本精神の発揚に資するとともに日本独自の文化・学問に対する理解・体認を得させることにあった。

この日本文化講義が当時の高等教育機関にとってどのようなものであったのか、また高等教育機関は「官製講義」とも呼ぶべきこの日本文化講義の実施要請に対しどのようなように反応したのかを知るために、学生新聞の記事等を数点紹

介しておこう。まず、東京帝国大学の学生新聞であった『帝国大学新聞』は第六三八号（昭和十一年九月十四日）の二面で「全国官立大学に／＼日本文化講義実施／＼情操教育徹底を計る」と縦に大見出しを打ち、次のように報道した。

文部省では教学刷新の目的を以て予てより全国高校の教授要目の改正、思想善導特別講義の統一拡充等を行ひ思想対策に資し來つたが先般行はれた教学刷新委員会席上右に関する諸講座を全国各帝大、官立大学にも設置し一般学生の認識を深め併せて情操教育を徹底せしめる必要ありとして文部省では今回同講座に要する予算を新に計上し講師並びに題目は各大学内自由銓衡に委せる（こ）と、し今秋から全国各帝大、官立大学に同講座の設置方を従憑してゐる、八月北海道帝大で行はれた全国帝大学生生事会議席上同文化講義実施状況の質問があつたが東北帝大及び九州帝大では既に実施せる旨を答申したが東北帝大では法文学部教授岡崎義恵、小宮豊隆、阿部次郎教授、医学部太田正雄氏等、九州帝大では宇井伯寿氏等の日本文化に関する諸講義が行はれている、本学側では未だ具体的実施に至らないが、九月中の評議會に同講座実施方法につき上提され全学部に決定をみる模様である。この記事が報じる通り、日本文化講義は文部当局による思想対策に他ならず、情操教育を徹底させるといふ目的で

当局による予算措置がなされた思想善導講義であつた。ただし、当局からの要請に対し、東北帝大、九州帝大は速やかに実施に踏み切つたが、東京帝大は記事の報道時点で実施に至らず同じ帝国大学内でも対応は分かれていた。<sup>10</sup>

『京都帝国大学新聞』は第二五一号（昭和十一年十一月五日）の一面で「諸權威を動員して／＼日本文化講義／＼三回六時間にわたり」と縦の大見出しを付け「文部省では教学刷新の見地から大学並に直轄諸学校の学生生徒に国民的性格の涵養および日本精神の発揚に資すると共に日本独自の学問、文化に関する十分なる理解体認を得しむる目的で、權威ある学者に委嘱して日本文化講義を各学校に於いて開講せしむることとなり本学に於いても十月から各学部で開講する」と報じた。その上で各学部での予定を伝え、最後に「なほ本講義の出席者に対しては希望に応じ聴講証明書

を交付すべく目下学生課でその具体的方法を考究中」と記事を結んでいる。

更にこの記事の横には「講義開始と同時に日本文化研究会成立」との見出しで関連記事が掲載されていた。記事は「ちなみに本講義開設と同時に本学内に日本文化研究会が組織されることになったが、今までに決定した会員左の如し」と伝え、会長の松井元興、法学部教授の牧健二、経済学部教授の神戸正雄・本庄栄治郎・作田莊一・石川興二、文学部教授の野上俊夫・西田直二郎・九鬼周造などの名前を列挙し、京都帝大内に「日本文化研究会」が組織されることになったことを報じている。

京都帝大で学生課が聴講証明書を交付すべきか検討した意図や日本文化研究会が学内で組織された背景等は記事だけからはわからず、『京都大学百年史 総説編』（平成十年六月）等にも記述がないため、現時点で詳細は不明である。出席率を高めるためにことさら聴講証明書を発行しようと学生課が文部当局を意識して考えたとも、あるいは受講するのであれば聴講証明書を発行して欲しいという希望が学生から出たとも考えられる。日本文化研究会を組織することについても日本文化講義を担当する教員の準備とも解釈できる。いずれにせよこれらの動きは京都帝大内での日本文化講義に対する一つの反応であった。

神戸高等工業専門学校の新聞『神戸高工新聞』は第九一号（昭和十一年十月十日）の三面で「情操教育徹底の爲／文化講義実施さる／全国大学、専門学校に率先して」という大見出しの下、次のように報じた。

文部省では教学刷新の目的を以て予てより全国大学、高校、専門学校の思想善導特別講義の統一拡充を行ひ思想対策に資してゐるが先般行はれた教学刷新委員会席上、右に関する諸講義を実施し一般学生の認識を深め併せて情操教育を徹底せしむる必要ありとし、文部省では今回同講座に要する予算を新たに計上し全国各大学、高校、専門学校に同講座の設備方を慫慂してゐる本校に於ても全国学校に魁けてこれが具体案を決定、過日九月二十一

日、東大名譽教授文学博士吉田熊次氏を招き「工業教育と日本精神」と題し二時間に亘る長講があつた、本講義は本年度は特に中途より実施すること、なつた為予算費用等の関係上、已むなく必修科目に準じて施行せられるが将来改正されて本質内容と共に必修科目となるべく予想され、従来の所謂特別講演と異なつてゐる同文化講義について如何なる方法形式を以て行はれるか未だ具体的には決定してゐないが全学的に行はれる性質のものであるから、総合的な文化講義として従来専門的研究にのみ専心し比較的看過され勝だつた時事問題方面の解説講演を行ひ、高等工業学生としての常識を涵養し以て情操教育を図らうとの説もあるが大体年に五回程行はれる予定である。

記事の前半は先に報道された『帝国大学新聞』の記事を準えて書かれた可能性がある。ただ、後半を読む限りでは文部当局から押し付けられた講義というような受け止め方や戸惑いが校内にあつたとは感じられず、「高等工業学生としての常識を涵養し」という文言にはむしろ日本文化講義に対し教養教育の補完といった思想対策以外の趣意を見出す姿勢がうかがえる。

最後に学生新聞ではないが、日本文化講義をはじめとする教学刷新の施策が打ち出された昭和十一年という年に対する東京高等師範学校教授・山田栄の回顧を見ておこう。『教育学研究』（第五卷第一〇号、昭和十二年一月）所収の「昭和十一年教育界の回顧」の冒頭で山田は昭和十一年という年について次のように述べている。

数年来膨膨として擡頭し來つた日本精神昂揚の運動は、昨年既に所謂「国体明徴」問題を契機として「教学刷新評議会」の設立を促したが、それが「教学刷新評議会」を通じて日本教育界に積極的に働きかけることは、その後に残された大きな課題であつた。この点から見て、天下の達識を集めた「教学刷新評議会」の研究と指導とを俟つて、昨今著しく觀念的回顧的な域を脱しつゝ、ある日本精神昂揚運動を、一段と実践的に展開しこれに一層具

体的な姿を与へるように、大いに期待せられたのが昭和十一年である。二・二六事件の結果、広田庶政一新内閣の成立するや、平生文相は、この日本精神昂揚運動の要望に答へるため特別議会に於て二十二万円の子算の協賛を得、昨年十一月以来総会及び特別委員会を開催して鋭意研究せる「教学刷新評議会」の意見を斟酌して、国体の明徴・日本精神の宣揚を図る目的で国体に関する書冊を編纂頒布する計画を立てた外、更に(一)直轄学校に日本文化講義の実施(二)日本文化教育講習会(三)日本諸学振興学会の開催の三大教学刷新方策を決定した<sup>11)</sup>。

この後で山田は日本諸学振興委員会の教育学会について従来の教育学派と新興日本教育学派の対立があったことを教育学を構成する場合の日本精神昂揚運動の現況を示すものとして詳しく論じている。その上で、山田は国体の明徴、日本精神の培養に関し未だ十分でない点があれば大いに反省すべきだと述べ、「我が国の教学は国体に基き日本精神に則り克く国礎を培養し国民を錬成して以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉るを根本義となす<sup>12)</sup>」ということを教育の当事者はよく自覚すべきだと言明した。教育学者であった山田は文部当局寄りの考えを採り、日本精神昂揚の運動に理解を示していたが、昭和十一年という年に対するこの回顧は日本文化講義をはじめとする教学刷新の施策が日本精神昂揚運動の流れの中で出てきたものであることを改めて認識させる書き振りになっている。

## 二 日本精神と田辺尚雄の日本音楽論

前述の通り文部当局が日本文化講義を高等教育機関に対して実施させたのは日本精神の發揚に資するとともに日本独自の文化・学問に対する理解・体認を学生・生徒に得させることを意図した上でのことであった。田辺尚雄が担当した日本文化講義の具体的な講義内容に立ち入る前に田辺がその著作の中で日本精神や日本音楽についてどのように



認識していたのかをまず検討しておきたい。

## (一) 日本精神論の流行

当時の時代背景として念頭に置かねばならないのは日本文化講義をはじめとする教学刷新の施策が採られることにもつながった日本精神論の流行である。文部省思想局は昭和十(一九三五)年十一月に「思想調査資料特輯」として『日本精神論の調査』という極秘の報告書を出した。同書の凡例に「本調査は日本精神の至醇なる発揚に資せんがために、主として昭和の初より今日に至るまでの間に現れた日本精神論の内容を調査することを目的としたものである」と書かれている通り、この報告書は満州事変以後の日本精神論の流行を受けた思想調査をまとめたものであった。同書の序にある次の文章は日本精神という言葉やこれが流行する当時の様子を的確に伝えている。

「日本精神」なる語が標語としての力強さと一種新鮮なる感觸とを以て、我が国民の間に急速に伝播するに至つたのは、大体昭和六年秋の満州事変以後のことである。翌七年及び八年には左翼的或は自由主義的傾向の強いものを除く定期刊行物の多くは、日本精神なる語を用ひ、「日本精神特輯号」等を刊行して一層流行の勢を援け、爾来この語は国民の間に広く受容せらるゝに至つた。勿論日本精神なる語は従来用ひられてゐた「大和魂」「やまとごゝろ」「国民精神」「皇国精神」「神ながらの道」等とその内容に於て著しく異なるものではない。又、近来日本精神と並び用ひられてゐる「日本主義」或は「皇道」とも大体同義語と見てよいのであつて、それは肇国の当初より脈々として今日に伝へられてゐるものではあるが、他の語に比し日本精神なる語は特に好んで使用され又魅力を持つてゐるが如くである<sup>13)</sup>。

同書は日本精神という言葉が多少なりとも社会的影響をもたらす刊行物の名前として用いられるに至つた時期を大

正十二（一九二三）、十三年頃としてゐる。すなわち、昭和二年五月に『日本精神研究』として刊行されることにな  
る大川周明による一連の小冊子「日本精神研究」の第一が大正十三年一月に社会教育研究所より刊行され、同年三月  
には安岡正篤が『日本精神の研究』を刊行した。そして、昭和六年秋の満州事変、七年二月の上海事変の勃発が国民  
的自覚と挙国的団結とを促すこととなり、「日本精神」という言葉が国民の間に力強い指導精神として急速に伝播し、  
これに関する著作や研究が相次いで登場することになったと当時の状況について整理している。

また日本精神論が台頭した理由を『日本精神論の調査』は、緋田工『日本精神新講』（昭和九年一月）に依りなが  
ら

内的には明治維新以来の欧米崇拜と模倣追隨の余弊が、政治、経済、思想等我国文化の各方面に深刻なる行詰り  
を生ぜしめたことを自覚し、之が打開の道を我国自身の内なる原理に求めんとするところから、又外的には日本  
の世界的躍進が欧米諸国の利害と相容れず、国際的圧迫のたゞ中に自主独往、自国のことは自国の特殊性に即し、  
内より湧き出づる本然の力によつて処理せねばならぬに至つたことからの、国民的自覚に由来するものである。<sup>14</sup>  
と、欧米崇拜・模倣追隨による行き詰まりへの反省や対外摩擦による国民的自覚に求めている。

このような日本精神論の流行は先に見た通り文部当局が教学刷新事業の一つとして昭和十一年より高等教育機関に  
対し日本文化講義の実施を要請していく背景ともなつただけに、日本文化講義を担当する講師も多かれ少なかれ日本  
精神について意識した上で講義の内容を考え、準備を行い、講義の場に臨まざるを得なかつたものと推測される。こ  
のことは田辺にとつても同様であつたであらう。

(二) 田辺による日本精神論的音楽論の展開

①明治・大正期における田辺の日本音楽論

田辺の言説に日本精神を意識したものが見られるようになるのはいつからなのか。これを検証するためにまずは明治・大正期における田辺の日本音楽論を簡単に見ておきたい。

明治四十二（一九〇九）年三月の論文「日本音楽の理論 附料の研究」で田辺は「音楽の方面を見るに東西両洋に於て相異なりたる径路の上に発達し来り、一は和声に重きを置き、一は旋律を主とせり。之を以て欧州楽は和声より来る種々の影響を受け、本邦楽は旋律より来る種々の結果を導き、各々芸術上独特の価値を備ふるを以て、之等を比較研究〔究〕すれば初めて音楽の真意を理解するを得」<sup>15</sup>と述べ、邦楽の音程、音階などに対し科学的な分析をしながら考察している。この段階での田辺は日本音楽を学術的、科学的な考察対象としており、日本精神論的な言説は全く見られない。

大正七（一九一八）年一月の論文「日本音楽の特質」では

今日の日本音楽の最高のものと西洋音楽の最高のものとを比較して見ると公平に考へて確かに日本音楽の方が劣つて居るといふことは私も明らかに認めて居る。又日本音楽の平均程度と西洋音楽の平均程度とを比較してもやはり日本音楽の方が劣つて居るといふことも認められる。然し日本音楽の全部（と言はずともその大部分）が全く西洋音楽の大部分よりも凡て劣等にあるものであるとは私は考へていない。<sup>16</sup>

と述べている。これは、日本音楽は西洋音楽と比較にならないほど劣つているとする兼常清佐の議論に対する田辺の反論であるが、田辺は日本音楽を一方的に称揚するのではなく、その内容、形式を西洋音楽と冷静に比較する態度を貫いていた。

その上で田辺は

従来<sup>17</sup>の日本音楽には頗る遜色が多いといふことを慨いて居るのは私も兼常氏も同じであるが、私はどこ迄も之を改良し高尚なものに導いて行きたいと思ふ。それには西洋音楽も大に輸入して見たい。然し之を日本の国民的特性と同化せしめるように骨を折つて行くことは必要である。全然従来の日本音楽を葬つて直ちにチュートン人種の音楽に化してしまふといふことは決して日本の幸福ではなく、それは最大の不幸である。斯様にチュートン化したから日本音楽が世界的に進んで行くのではなく、それは却つて日本の芸術全部の滅亡である。日本の国民的特性を中心にして發達して行つてこそ始めて日本音楽が世界的になり得るのである。<sup>17</sup>

と述べている。この時点での田辺は日本の国民的特性を重視しつつも徒に日本音楽の優秀性を説くのではなく、日本音楽の欠点にも向き合い西洋音楽との優劣をあくまで科学的に見極めるといふ姿勢を採っていた。

この田辺の姿勢は『日本音楽講話』(大正八年十月)の「第四章 日本音楽の批評(西洋音楽との優劣問題)」にも明確に確認できる。田辺はここで西洋音楽と比べた日本音楽の優劣を拍子、音階、和声、作曲法など様々な観点から詳細に論じた上で、

日本音楽にも欠点があれば西洋音楽にも亦欠点がある。然し孰れの欠点が多いかといふに、どうも日本音楽の方が西洋音楽よりも欠点の数が多<sup>18</sup>いようである。之に由て他の長を採て己れの短を補ふといふことは日本音楽も西洋音楽も共に勉めなければならないことであるが、日本音楽の方は尚ほ一層此の点に留意しなければならぬ。<sup>18</sup>

(傍点は原文)

と結論づける。

ただ、田辺は「日本音楽は実に日本国民の歴史に依て起つたのである。日本国民の歴史を無視してそれで日本音楽

の価値を論じ、又その将来の方針を定めんとすることは無暴の極である。……西洋音楽は日本音楽よりも長所が多い。然しそれだけの理由を以て今直ちに日本音楽を棄て、西洋音楽を以て之に代へるといふことは暴論である、不可能事である<sup>19</sup>とも述べ、日本音楽に対する歴史的考察の必要性を説き、西洋音楽への偏重を戒めていた。その上で、日本音楽の将来に関し最も適当な方法として「(イ)彼の長を採つて我が短を補ふといふやり方をして居ると日本音楽は漸次凡ての点に於て発達して行くと同時にその組織及び主義に於て漸次西洋音楽に接近して行く、即ち日本音楽が世界的になつて行く。／(ロ)国民の教育を進めて行つて世界の文化に同化せしめて行く。／(ハ)日本国民の歴史を世界的ならしめるように国家の発達を助成して行く」<sup>20</sup>の三点を挙げ、この章を結んでいる<sup>21</sup>。

これらの論述を踏まえると、明治・大正期の田辺の日本音楽に関する問題意識は日本音楽について客観的に評価すべきであるという立場に立っており、西洋音楽への盲従を戒めながらも日本音楽の欠点を冷静に見つめ、単に日本音楽の優越性を高唱するような態度は一切採らなかつた。

## ②日本精神論的言説への第一歩―昭和五、六年の田辺

西洋音楽と日本音楽の優劣を客観的・多面的に比較検討し、日本音楽は西洋音楽よりも欠点が多い、西洋音楽は日本音楽よりも長所が多いと論じていた田辺が、義理、人情、道徳といった精神的なものを引き合いに出すことにより日本音楽を西洋音楽よりも高く評価し、更には日本が音楽に恵まれた国であると言いつけるのが昭和五（一九三〇）年十二月に刊行した小冊子『家庭と音楽』である。

田辺は同書の中で「徳川時代の花柳中心の日本音楽の中には、到る所に義理と人情との道徳に支配された高尚な思想が現はれて居ますが、今日のカフェー中心の洋楽は罪悪と道徳頹廢、人道紊乱の下等なる軽佻浮華の思想が現はれ

て居ます」<sup>(22)</sup>と指摘した上で、

我が国には二千余年の昔から今日に至るまで実に夥しい沢山の種類の音楽がありました。それはその間に朝鮮、支那、印度、その他の諸外国から屢々新しい各種の音楽が輸入されて、それが或は其儘行はれたものもあり、またはそれが種々に形を変へたり、それからまた新しい音楽が発生したりして、その歴史上に種類の多いことは実に世界中の如何なる他の国にも優つて居ります。然るにそれ許りでなく、是等の千種万態の各音楽が皆悉く今日に残り伝へられて世に行はれて居るといふことは、恐らく世界中の如何なる他の国にも全く存在しない現象であります。これ全く我が国が万世一系の皇室を戴いて連綿として絶えないからでありまして、実に我が国民の幸福であります。<sup>(23)</sup>

と断じている。

ここでは日本音楽の優秀性を万世一系の皇統に求めており、大正八（一九一九）年の『日本音楽講話』に見られた日本音楽と西洋音楽の優劣を科学的に比較するという姿勢とは明らかに異なっている。

昭和六年十二月に刊行された小冊子『日本の音楽』で田辺は日本音楽と西洋音楽についてその面白い方の相違に焦点を当てながら論じた。この小冊子で注目されるのは当時の代表的な日本精神論者である安岡正篤の東洋文化論に対して田辺が全面的な賛意を示している点である。すなわち田辺は西洋文化と東洋文化に関する安岡の考え方を紹介し、此の安岡氏の論は所謂の分析と総合とを兼ね、才徳兼備し、実に西洋文化と東洋文化との立ち場を明らかにして、従来誤解されて居た東洋文化の世界的意義を明らかにし、その価値の何處にあるかといふことを述べて、そして此の両者を融合して真に今日及び将来に於ける大人格の文化を築き上げようとせられたものでありまして、私は氏の論に満腔の敬意と賛成とを表するものであります。<sup>(24)</sup>

と述べている。人間の心の働きには、分析的（知の働き）と総合的（情の働き）との二つの方面があり、分析と総合との働きを示す才と徳の二つが兼備融合されて初めて理想的な人格を備えた文化人が生じるという「才徳兼備」の考え方への全面的賛同であった。

田辺は安岡の論を自らの西洋音楽と東洋音楽の考え方に援用し、

私は考へますのに、真の大人格は才徳兼備にあります。即ち分析と総合とが著しく発達して真に相融合されたところにあります。殊に芸術は人格の反映であります。将来の最も正しい我々の音楽は、分析と総合と二者の真の融合になるもので、新しい日本音楽は此の理想に向つて進んだものでなくてはなりません。さうでなければそれは今日及び将来の国民を指導すべき立派な芸術とは言へないこととなります。<sup>(25)</sup>

と説く。この考え方は後述するように昭和八年十二月の論文「日本音楽の本質」に引き継がれ、戦時期における田辺の日本精神論的音楽論の基調をなすものとなっていく。

『日本の音楽』で田辺は、西洋音楽の合奏は指揮者の命令通りに動けばよく、各演奏者の精神の発動というよりも機械的な演奏であるのに対し、日本音楽の合奏は各演奏者の一音一音ごとごとくがその精神の発動から起こらなければできないことを説き、日本音楽が如何にその精神的方面に重きを置いているかについても言及している。日本精神や国民精神といった言葉こそ用いられていないが、『日本音楽講話』で見られた分析的な記述からは遠い、精神主義的な記述が前面に出ている。

また、『日本の音楽』の結びになる「食卓上の楽論」では、大正二年九月二十六、二十七、三十日の『時事新報』紙に掲載された、西洋音楽よりも日本音楽が優れているとするドイツの音楽学者アルフレート・ウエスタール（Alfred Westarp、田辺は「ウエストハーブ」と表記）との談論記事が紹介されている。ウエスタールが展開した

「今の日本は余りに西洋音楽に盲従し過ぎて居ます<sup>26</sup>」とする二十年近く前の議論をことさらに持ち出し講座を締めくくったところに田辺の日本音楽を称賛する意図が透けて見える。

これまで見てきた小冊子『日本の音楽』において田辺が述べたことの一部は『都山流楽報』第二六八号（昭和六年九月）に田辺が寄せた「天山莊楽談（三十八）」の<sup>(72)</sup>「音楽鑑賞の態度と東洋文化の世界的意義」に書かれていた。この中で田辺は現代の青年が論理癖に陥っていることを指摘し、安岡の講演も引きながら人間の心の働きに「分析的」と「総合的」の二つがあることに触れ、才徳兼備の必要についても語っている。そしてこの楽談は「真の大人格は才徳兼備にある」という『日本の音楽』で論じたのとほぼ同じ趣旨の言説を以て結ばれていた。

後に田辺は『都山流楽報』第三一一号（昭和十年四月）に書いた「天山莊楽談（七十五）」の「<sup>(146)</sup>古いと新しい」と日本精神の誤解」の中で「徒らに洋楽の模倣にのみ走らないで、日本精神の美点を認めて其の發揮に勉めることが大切だといふことは、昭和六年九月の本楽談<sup>(27)</sup>」<sup>(38)</sup>で述べて以来、再三繰返して来たこと<sup>(28)</sup>だと述べている。実際に「日本精神の美点を認めて」というような表現は「天山莊楽談（三十八）」では用いられていないが、ここでの記述から見ても田辺の日本精神論的な言説への第一歩は昭和五、六年であると考えてよいであろう。

### ③ 日本精神論的音楽論の本格的展開―昭和八、九年の田辺

昭和五（一九三〇）、六年に田辺が示した日本精神論的言説が継承され、本格的に展開していくのが昭和八年の二つの論文である。一つは「日本音楽の本質」〔日本精神講座〕第二巻、昭和八年十二月）、もう一つが「楽曲と日本国民性」上』『中』『下』（『調査時報』第三卷第二号、二二号、二三号、昭和八年十一月、十二月）である。

「日本音楽の本質」には先に見た昭和五年十二月の小冊子『家庭と音楽』や六年十二月の小冊子『日本の音楽』で



展開した所説と共通の問題意識が見られるが、この段階で田辺は、音楽技術や演奏形式等ではなく思想的・精神的要素を前面に出して西洋音楽よりも日本音楽が優れていることを強調しており、日本精神論的音楽論に踏み込んでいった。

この論文は小冊子『日本の音楽』で展開した「真の大人格は才徳兼備にある」という論で結ばれているが、ここで特筆すべきは日本音楽の特質として、田辺が①世界文化の総合融和、②音楽と文学及び劇等の芸術の総合、③神道と儒教と仏教との融合ならびに武士道精神、を挙げている点である。このうち②については既に大正十五（一九二六）年二月の『日本音楽の研究』で示された「近世の日本音楽には劇的の性質を帯びた歌曲が大部分を占めて居る」という指摘を敷衍させたものである。①の世界文化の総合融和すなわち「日本音楽の一つの特質は、世界文化の総合の上に立つ精神的融合にあると私は考へてゐる」という田辺の主張は当時の日本精神論に特徴的な外来文化に対する日本精神の包容性・包摂性を説く思想と共通している。

日本精神論の視点から注目されるのは③である。これについて田辺は

元来仏教は国家主義的のものではない。併し国家観念のないものは我が日本に於ては発達しない。これに對して神道は真に日本の国家観念の発露である。茲に於て我が国に於ては外来の仏教は神道と融合し、これに道德觀念を強調した支那の儒教が結び付いて、日本の神道と、支那の儒教と、印度の仏教とは、我が国に於て一つに結合融和して、近代日本の国民思潮を生じた。その最も大なるものは武士道であり、その武士道が芸術となつて現はれたものが、真の日本音楽である。そのことは、我が能楽を見ても、義太夫を見てもよく分る。<sup>31</sup>

と説く。その上で日本音楽の特質の第三として「神道と儒教と仏教との融合に依つて独特なる日本の国体觀念に綜合され、特殊なる武士道精神に基いてゐること」<sup>32</sup>を挙げ、「国家観念」や「国体観念」あるいは「武士道精神」など日

本精神と親和性の強い言葉を用い論じている。田辺の言説はこの昭和八年の段階で日本精神論的音楽論として本格的に展開していくこととなった。

「日本音楽の本質」とほぼ同時期に発表された「楽曲と日本国民性『上』『中』『下』」で田辺は日本音楽の本質として総合的性質を持つことを指摘し、「日本音楽は形式上に於て総合的であること」<sup>33</sup>、「日本音楽は内容上に於て総合的であること」<sup>34</sup>、「日本音楽は思想上に於て総合的であること」<sup>35</sup>（傍点はいずれも原文）を日本音楽の三大特性として列挙した。これらは前述した「日本音楽の本質」で田辺が挙げた「世界文化の総合融和」、「音楽と文学及び劇等の芸術の総合」、「神道と儒教と仏教との融合ならびに武士道精神」に関する所説にそれぞれ相当する。

田辺はこれら三つの特性を詳細に論じ、日本音楽の特性について形式的にも内容的にもまた思想的にも常に総合的であって、西洋音楽のように部分的に分析的に発達したものではないと述べ、近來の音楽研究者があまりに分析的であることを批判した。

日本音楽が形式上、内容上、思想上において総合的であることを説くのは昭和十三年三月の『日本精神と音楽』（国民精神作興叢書）第八輯）の「(三) 日本音楽の本質」に引き継がれていく。

昭和九年になってから田辺は『教育研究』第四一三号（昭和九年一月）に書いた論文「日本音楽の精髓」で日本の普通教育で取り扱われている音楽が全て西洋音楽を基礎とするものであり、日本音楽が度外視されていることを批判し、「楽曲と日本国民性『上』『中』『下』」と同じく日本音楽が形式上、内容上、思想上において総合的であることを日本音楽の国民性から見た特性として指摘した。

この「日本音楽の精髓」では、「日本音楽の本質」（昭和八年十二月）と同じく才と徳の兼備融合の必要性を説き、田辺が最後に次のように述べた点に注意を要する。

私は考へる。真の大人格は才徳兼備にある。即ち分析と総合とが著しく発達して相融合された所にある。殊に芸術は人格の反映である。将来の最も正しい我々の事業は、分析と総合との二者の融合にある。言ひ換へれば日本精神を持つて、真の日本音楽が分析的研究を遂げて世界的になつた所にある。<sup>(36)</sup> (傍点は引用者)

これまで見てきた通り田辺は安岡正篤から影響を受け、「真の大人格は才徳兼備にある」という主張を『都山流楽報』の「天山莊楽談（三十八）」（昭和六年九月）、『日本の音楽』（昭和六年十二月）、「日本音楽の本質」（昭和八年十二月）と再三にわたり示してきたが、田辺の日本音楽論の基調をなす「才徳兼備」という考え方は日本精神と結びついたものであることが昭和九年一月の「日本音楽の精髓」で明確になつた。

#### ④ 音楽による国民教化への論及―昭和十年の田辺

田辺の日本精神論的音楽論は昭和十（一九三五）年十月の小冊子『音楽と教化』で広がりを見せる。この小冊子では日本精神や国民精神という言葉は全く見られないが、「音楽の本体は精神生活の表現にある」という言葉に象徴されるように人間の精神生活に重きを置いた記述により音楽を以て社会教化を図ることについて田辺は論及していく。

田辺は現代の芸術を現代人の精神生活の中に正しく採り入れるためには現代人に音楽教育を施す必要があり、「音楽教育の本体は娯楽でもなく又た社会的教化でもなく、全く当人の精神生活の表現としての芸術を吾人の人格の中に採り入れることである」と述べる。<sup>(37)</sup> 音楽教育においては我々の精神生活の中に音楽を採り入れることが何より重要となる。また、技巧は芸の手段であり、精神の感激がなければ如何に巧妙に演奏されてもそれは娯楽物であり芸術的なものとは認められない。田辺によれば「学ぶは技巧、生かすは魂」<sup>(38)</sup>であり、魂の表現は技巧を待つて行われるのであるから両者は不即不離の関係にあることを了解しなければならぬということになる。

更に田辺は亡国的音楽すなわち国を亡ぼす性質を持った音楽とは何かということに触れる。中国の各時代の音楽の例を挙げた上で、田辺は「音楽の精神表現が第一の目的となつて居り、技巧はその表現に伴つた手段として行はれてゐるやうなものが興国的音楽であり、之に反して技巧が第一の目的となつてゐて、音楽の精神が忘れ去られてゐるやうなものが亡国的音楽である」と唱え、「善尽せり美尽せり」という孔子の言葉を引き、芸術と道徳とは最高点において相合致すべきものであることを指摘した上で、「人格の完成、其所に始めて偉大なる芸術が存在する」との言葉を以てこの小冊子を結んだ。

『音楽と教化』では音響学のような科学的・客観的に音楽を分析するような立場ではなく、精神主義的・主観的に音楽を捉える姿勢が鮮明であり、田辺の日本音楽論は音楽による国民教化という視点も有するものに拡張していった。この小冊子とほぼ同じ時期に書かれた論文「東洋音楽の長所」（東亜民族文化協会編『東亜文化論集』、昭和十年十二月）では、田辺は西洋は分析的、東洋は総合的とし、東洋音楽の長所を分析的でなく総合的である点（＝アジアの全部の良い音楽を集めて総合している点）に求めている。これまでも繰り返し返してきた才徳兼備を説いているが、ここでは「総合、分析共に行かなければ将来の音楽はないと思ひます。西洋音楽もよいのですが、然し西洋音楽の最も大きな欠点は靈を直感するといふことがない。所謂その東洋音楽の真髓である靈の直感といふことをどうかして行きたいと思ひます」と「靈の直感」という科学的に説明が困難なものを田辺は持ち込んだ。「新しい今日の日本音楽と称すべきものは東洋の精神である靈を直感する、大きな総合的なものを分析的に研究して起つて来るべきものかと思ひます」という言葉からは精神主義的な言説に田辺が一段と傾斜していったことを感じさせられる。

⑤ 日本精神論的音楽論の集成―昭和十三年の田辺

昭和十三（一九三八）年三月に「国民精神作興叢書」第八輯として発行された小冊子『日本精神と音楽』で田辺の日本精神論的音楽論は一つの集成を見る。まず田辺は同書の緒言で日本精神と芸術について次のように語り出している。

日本精神といふことを其の理論上から説くことになると頗る高遠であつて、今日の社会の大多数の民衆には其の了解が困難である場合が多い。然るに芸術とか趣味とかいふことになると、それは最も多く直接に国民性を反映し、その中に自然と国民の精神を蔵して居るものであつて、而かも此の芸術趣味といふものは最も広く国民の心を捉へて居るものであるから、其の指導教育を適当にすれば、之に依つて我が国民の間に日本精神の如何なるものであるかといふことを、不知不識の間に極めて平易に納得せしめ、最も深く心に植え附けることが出来るものと信ずる。<sup>45</sup>

音楽こそ国民の精神文化を象徴するバロメーターでありながら、音楽を国民芸術の最高点に置くことを知らぬ者が多いことを田辺は嘆き、これが国民精神の作興に重大なる障害をきたすことを憂いてこの小冊子を草することになつたと述べている。

続いて「(一) 日本音楽とは何ぞや」において田辺はそもそも日本音楽とは何か、巷間で考えられている様々な定義を検討した上で、「日本音楽とは日本の国民の間に其の国民性の表現に依つて出来た音楽であつて、即ち日本国民の歴史に基いて作られた音楽をいふ<sup>46</sup>」と結論を提示する。大正十五（一九二六）年二月の『日本音楽の研究』では田辺は日本音楽を「日本国民の間に発達した所の音楽<sup>47</sup>」としていたが、ここでは「国民性の表現に依つて」、「日本国民の歴史に基いて」という言葉で説明した。

〔二〕 日本音楽変遷の概観」は昭和八年十二月の論文「日本音楽の本質」における日本音楽の歴史的概観の内容をほぼ踏襲した内容であり、〔三〕 日本音楽の本質」は前述した通り昭和八年十一月・十二月の論文「楽曲と日本国民性『上』『中』『下』」の議論を継承した内容になっている。〔四〕 日本音楽と西洋音楽」は昭和六年十二月の小冊子『日本の音楽』と内容が重複しており、〔五〕 音楽と娯楽」以下は昭和十年十月の小冊子『音楽と教化』で展開した議論の再論である。

以上の点を踏まえれば、昭和五、六年に第一歩を踏み出した田辺の日本精神論的音楽論は以後、本格的に展開し、国民教化という視点も加えながら、昭和十三年の段階で内容的にはほぼ固まったと考えられる。ただ、これまで見た小冊子や論文で展開されていた田辺の日本精神論的音楽論は「日本精神」や「国民精神」といった言葉をほとんど用いておらず、日本精神を徒に鼓吹するというような立場からは遠く、総じて日本精神への言及は抑制的と感ぜられるほどであった。先に引用した『日本精神と音楽』の緒言にある通り、田辺は日本精神を理論上から説いて理解させることの困難さを認識しており、日本音楽を通じ日本精神を理解させるには実際に音楽を聴かせるしかないと考えていた。このことが小冊子や論文で日本精神への言及が抑制的になった理由と考えられる。

これに対し『都山流楽報』に連載している「天山莊楽談」では日本精神への言及に抑制はない。例えば、先にも見た同誌第三一一号（昭和十年四月）の「天山莊楽談（七十五）」の「<sup>(146)</sup>古いと新しいと日本精神の誤解」では

古曲を得意とする者は、十分勉励して古典の真価値を世界に發揮せしめ、日本精神の高遠を世に知らしめると共に新曲者を鞭撻して立派な世界的音楽を一日も早く作るやうに指導してもらひたいし、また新曲を得意とする者は、よく世界文化の大勢に精通すると共に、世界の思想の動きを指導する地位に立つことを忘るゝことなく、また一方に於て此の立派な日本精神を離れることなく、一日も進むことを忘れないようにしてもらひたい。<sup>(18)</sup>

と日本精神という言葉を繰り返し用いている。<sup>(49)</sup>

同誌第三四六号（昭和十三年三月）に田辺が執筆した「天山莊楽談（百五）」の「(20)日本精神と趣味教育」では少女歌劇やレビュー、ラジオドラマなどにおける若い女性の乱暴な言語を強く批判する一方で、俳句、尺八、義太夫、能の仕舞などを立派な精神修養をなす趣味として称賛し、「真の東洋芸術の精髓を以て今日の青少年の教育に資したならば、日本精神の教育は自然の中に易易として成功するものであると信ずるものである」<sup>(50)</sup>と日本芸術を正科として課す日本精神の教育の重要性を訴えている。あくまで推測の域を出ないが、小冊子や論文とは異なり、随想において文字通り随意に想いを綴ればよいという気楽さ故に論理的な記述よりも情感を優先した記述になった可能性がある。田辺が実際にどこまで意識していたかはわからないが、以上見てきた通り日本精神論的音楽論を展開していく中で昭和十三年までの田辺に関しては日本精神という言葉の使用に関し小冊子・論文では抑制的、随想では開放的という相違があったことが認められる。

#### ⑥ 神国思想への傾斜―昭和十四年以降の田辺

昭和十四（一九三九）年になると田辺の日本精神論的音楽論には神国思想が明確に確認できるようになる。同年十月の論文「国民音楽の指導性」（『社会教育』第一〇巻一〇号）で田辺は日本音楽について語る中で「第一に我日本帝國は神国である。天皇は現つ神に座します。日本臣民は我々の祖先と崇め奉る天祖大神を拝し、現つ御神なる天皇を敬し奉ることは、取りも直さず敬神思想であつて、国民教育の根幹である。……日本音楽の特性の第一は邪念を禁じ、感覚の刺戟挑発を抑制するにある。之れ即ち純真なる敬神思想の養成にあらずして何であるか」と述べ、神を拝すとすという日本精神を養成するものが日本音楽であり、ここに日本音楽の指導性の一つがあるということを説くに及んでい

る。

『教学叢書』第八輯に収録された昭和十五年三月の論文「日本音楽の真髓」では「国民音楽の指導性」で述べたことを敷衍しながら神国思想が展開される。

この論文で田辺は国家非常時における音楽教育の重要性から説き起こし、多年にわたる日本国民の信念の表現である日本音楽を通じた国家観念の養成の必要性や日本音楽の真髓が武道精神にあることを述べ、日本音楽の優秀性について日本の楽器を例に取りながら世界文化の綜合融和を中心に論じている。

田辺の神国思想への傾斜が確認できるのは「三 敬神思想の涵養と音楽」である。そこで田辺は「天皇は現つ神にましまし、治国の大道は神慮に基づいて行はせられる。是れ即ち神ながらの道であつて、未来永劫変ることなき我が国の国是であることは、今更申す迄もないことである」と「神ながらの道」に触れ、更に次のように説く。

此の精神の浄化剤は音楽を以て第一とする。あのアリストテレスが「音楽は精神を清浄にする」と述べたのも全く此の意味である。況してや我が国は現つ御神の治め給ふ神国であり、神は不純を受け給はぬ。して見れば我が日本国民が音楽を粗略にすることはありうべからざることと言はなければならぬ。

田辺によれば音楽は精神の浄化剤であり、日本音楽の大部が神慮に適うものとなる。これ以降も田辺の日本音楽論は以下で見る通り、神国思想への傾斜が激しくなっていく。

例えば昭和十八年六月の論文「文化戦争と日本音楽」(『興亜』第四卷第六号)で田辺は音楽の働きを「動物性」(音楽により娯楽し、慰安し、勇気を鼓舞するなどの広く動物に共通した働き)、「人間性」(音楽を通して思想を表現し、精神生活を豊かにしようとする働き)、「神性」(音楽によってその徳を崇めて神に近づく働き)の三点に区別して論じている。音楽を通じて徳を高め神に近づくという音楽の神性を人間に対する音楽の根本使命とする考えは田辺の言



説がかなり非合理的で精神主義的なものになったことを示している。

田辺はこの論文の中で「神州日本は天祖天照大御神の御末にして、万世一系の天皇は即ち天祖の御子孫であらせられ、現つ御神であらせられる。而して神州日本の臣民は皆神々の子孫である。それ故に敬神は即ち尊皇であり、そこに万世不易の我が皇道が存する。此の皇道に基づく音楽が始めて正しい日本音楽であつて、西洋の如く作曲者第一主義の個人主義的な人間性音楽は、之れを正しい日本音楽と認めることは出来ない」と述べ、神国思想への傾斜を鮮明にした。

他にもこの論文では「どうしても我々は皇道に基づく日本の音楽科学を創建するの必要がある」、「我々はよく日本音楽の真髓を究明して、皇道に基づき、一切の矛盾なき天理に順応したる音楽の理論を建設し、之れを万国共通なる科学の上に立たしめて以て我々の日本音楽科学を作り出すべきであつて、それが又やがては将来の大東亜音楽科学ともなり、また新しい世界音楽科学ともなつて行かなくてはならないと思ふ」などの記述が見られるが、皇道と音楽科学とをどのように結びつけるのかという方法論は示さぬままに議論を展開していた。

また、昭和十九年七月に刊行された田辺の小冊子『神祇と音楽』は「我が日本は神国である。伊弉諾、伊弉冉の二神此の国土を生み成し給ひ、天照大御神高天原を治め給ひ、皇孫瓊杵尊大八洲に天降り給ひてより、万世一系の皇統連綿として今日に及び、今やその光輝全世界を被ひて、未来永劫、天壤と共に窮りなくものであつて、真に世界に存在する唯一つの神国である」という言葉で始まる。「敬神思想普及資料」として神祇院から発行された小冊子といえ、神国思想を背景とした強い表現で書き出しがなされている。

田辺によれば日本音楽は日本国民の魂の奥底に堅く捧持してきたところの日本精神の現れであり、それが即ち日本文化の真髓であり、日本文化の苗である。これに対して外来文化は日本文化の苗を育てていく肥料となる。

田辺はこの小冊子の中で日本音楽に対する誤解や日本音楽の実体は一つの歴史であることについて詳論した上で、「祭祀の楽としての雅楽」について「音楽に依つてその徳を崇め、一步でも神様に近づいて行くといふ、之れを音楽の神性と言ふのであるが、その音楽の神性と言ふことが、人間に対する音楽の根本使命であつて、之れを私は「正しい音楽」と呼ぶのである。我が日本雅楽の真髓は即ち此の正しさをいふことにある」と訴え、日本雅楽こそが善を尽くしかつ美を尽くした「正しい音楽」であると主張した。

田辺は西洋音楽がいかに人間的であり個人主義的であるかとこれを批判した上で、次のように述べている。

要は全世界人類の永遠の平和隆盛を熱望するものである。それが為めには西洋の喰ふか喰はれるか主義、即ち個人主義的な音楽に代つて、雅正なる音楽を以て世界を光被しなくてはならない。そこに我が日本雅楽の精神の尊さが存在するのである。然るに今日我が国の青年男女の多くは徒らに此の頽廢した西洋文化の盲信崇拜に陥つて居て、我が雅楽の如きは之れを古物骨董視して一顧だにしないのは以ての外の心得違ひであると言はなければならぬ。幸ひにして此の日本雅楽は今日宮中の御饗宴のみならず、各神社の祭儀に用ひられて居ることは難有いことであつて、我が神威の世界に及ぶと共に、此の雅楽も共に世界に拡布されるに至るならば、此の正しい音楽の精神は遂に世界の人類を此の喰ふか喰はれるか主義の不幸から救ひ、永遠の平和と幸福を得せしめることが出来ると思ふ。そのことが八絃為字の御精神の一つの現はれてはならぬ。

前述した通り大正八（一九一九）年十月の『日本音楽講話』でも田辺は日本音楽を棄て西洋音楽を以て代えることが暴論であるとしていたが、ここに來て田辺は単に西洋音楽への盲信を戒めるのみならず世界を光被するものとして日本雅楽を称揚し、その精神が「八絃為字」の精神の一つの現れであると熱弁するまでに及んだのである。

なお、田辺の神国思想への傾斜は『都山会楽報』に連載していた随想「天山莊楽談」からもうかがえる。その典型

は昭和十七年一月の同誌第三九二号掲載の「天山莊楽談（百三十三）」に収載された「(248)皇紀二千六百二年神軍譜」である。ここで田辺は「今や、世界第一の海軍／世界第一の陸軍／世界第一の空軍／之れを兼ね備ふる者は／我が神州帝国唯一つあるのみ／地球上に国を建つる百億の民も／我が神州の命に背きては其の存在を許さるゝ者なし」と神国日本を誇った上で、日本音楽についても「将来世界の人々は熱心に／日本音楽を拜する時は来れり／……／今日世界を震撼しつゝ、ある砲声は／やがて美しき音楽の声と変る時来れば／諸君日本音楽家の任務の如何に大なる／その時こそ諸君日本の楽人は／神に召されたる勇士として／世界いづこの隅までも／日本音楽の旗を打ち立てよ」と綴り、世界の音楽を指導するものとして日本音楽を高唱するに至った。

### (三) 日本精神論の諸類型から見た田辺の日本音楽論の位置づけ

以上見てきた通り、田辺尚雄の日本音楽論は昭和五（一九三〇）、六年より日本精神論的言説へと歩み出し、八年から日本精神論的音楽論として本格的に展開していくこととなった。それは国民教化という視点も持ちながら昭和十三年には集成し、他方で十四年以降は神国思想へ傾斜していった。

先に（二）②で述べた通り田辺は昭和六年十二月の小冊子『日本の音楽』の中で安岡正篤の東洋文化論に全面的な賛意を示しており、安岡が同年五月三十日に日本工業倶楽部で行なった講演「東洋文化の世界的意義」(財団法人啓明会主催)で提示した五つの例を田辺は『日本の音楽』の中でもしばしば用いている。特に伯楽に関する例については田辺は『日本の音楽』以降の著作にも用いており、才徳兼備を説く田辺の日本音楽論は安岡から多くの示唆を受けたものであると見られる。ここではこのような田辺の日本精神論的音楽論が満州事変以降に流行した日本精神論の中でどのように位置づけられるかを考えてみたい。

(一) で言及した文部省思想局『日本精神論の調査』(昭和十年十一月)では日本精神論を①革新的日本精神論、②理論的日本精神論、③実践的日本精神論の三類型に分類している。①は左翼思想及び運動に意識的に対抗して起こり、国家の改造を主眼とする人々によって唱導された日本精神論である。②は日本精神を理論的に究明し、それがどのような本質、特性、歴史的淵源を有するものであるかを明らかにすることを課題とするものである。そして③は理論的日本精神論が日本精神の実践的把握を閑却しやすすい短所があることを洞察し、国民各自日々の生活のうちに日本精神を実現すべきであると主張するものである。

同書の中で名前が挙げられている日本精神論者の中に田辺の名前はない。しかし、理論的日本精神論が日本精神の特性として挙げる「日本固有の精神が外来文化に対して示した包容性或は包摂性が一般に目立つて強調せられてゐる」という点から考えれば、田辺の日本音楽論は理論的日本精神論に分類されるものであろう。<sup>64</sup>

東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法制史料センター原資料部が所蔵する石井勲関係文書に「昭和十三年十月日本精神に関する諸説の現状調査図書目録」(教学局企画部企画課)という文書(目録番号・1203)と「昭和十四年参月」と押印された「日本精神論の現状調査前篇」(教学局企画部企画課の作成と見られる)という文書(目録番号・1202)がある。文部当局は『日本精神論の調査』を出した後も日本精神論に関する調査を継続していた。

このうち「日本精神論の現状調査前篇」では、日本精神論の諸類型として、八類型が簡単な説明文とともに次のように示されている。

(一) 日本の世界支配を唱道する日本精神論型

これに属する論は、啻に日本の優秀性を説き、或は日本の最後の繁栄を唱ふるに止まらず、進んで積極的に日本の世界支配を唱道し、文化的・政治的・外交的乃至は軍事的に之が実現を主唱するものである。

(二) 日本の最後の繁栄を唱道する日本精神論型

これに属する論は、単に日本の優秀性を論ずるに止まらず、日本は断然他国とその本質を異にし、他国が当然衰亡の運命を辿るにも不拘、独り我が国のみは永遠に繁栄するものなることを唱道する。但し(一)に於ける如き積極的世界支配にまでは言及せざるものである。

(三) 単に日本の優秀性を唱道する日本精神論型

これに属する論は最も多数に上り、我が国の優秀にして世界に冠たる所以を種々の部面より論ずるものである。但し(一)及び(二)に於ける如き特異の意図乃至主張は之を藏せざるものである。

(四) 純客観的に日本の特質を記述する日本精神論型

これに属する論は必ずしも日本の優秀性を説かざるにあらざるも、飽く迄も理論的学問的に客観的態度を持ち、日本の特質を記述するものである。

(五) 外来文化の積極的摂取醇化を唱道する日本精神論型

これに属する論は、我が国が古来諸種の外来文化を次ぎ次ぎに輸入し、之を克く消化し且つ培養蓄積し来りたる跡に鑑み、偏狭なる態度を排し、積極的に現代欧米文化を摂取醇化し、以て博大なる日本文化を創造せんことを唱道するものである。

(六) 理論を排し実践を強調する日本精神論型

これに属する論は、日本精神の把握が理論を以てしては不可能なることを論じ、専ら行的実践による体得に俟つべきを強調し、理論的究明を軽視するものである。

(七) 国内革新を唱道する日本精神論型

これに属する論は、夫々の抱懐する日本精神論に立脚し、或は理論的に、或は実践的に国内各般の革新を唱道するものである。

(八) 専ら批判的態度を持する日本精神論型

これに属する論は、今日行はれつつある諸種の日本精神論に対し、全般的に否定的態度を持するものにして、或は之に対し殆ど全く批評的態度に止まり、或は日本精神を以て単なる封建的精神の遺物となして之を排撃するものである。

これらの各類型はそれぞれにおいて更に細かく分類されている。例えば(三)であれば「イ、国体の優秀性を説くもの」、「ロ、民族性の優秀を説くもの」、「ハ、日本文化の優秀性を説くもの」の三類型に分けられ、その中でも例えば「イ、国体の優秀性を説くもの」であれば(イ)国史に基づくもの、(ロ)国文学に基づくもの、(ハ)国民道徳に基づくもの、(ニ)神道に基づくものといった具合に一段と細かく分類されている。

なお、(二)～(八)の分類がどのような基準でなされているのか、詳細は不明である。安岡や平泉澄が(三)、(六)、(七)に、西田幾多郎や田辺元が(四)と(五)に挙げられているなど、複数の型に分類されている者もあり、必ずしも一つの基準のみにより分類したものではないと推察される。

「昭和十三年十月日本精神に関する諸説の現状調査図書目録」には田辺の名前や著書は出ていないが、「日本精神論の現状調査前篇」には田辺の名前が確認できる。田辺は岡倉天心、福井利吉郎、柳宗悦、金原省吾、和辻哲郎、長谷川如是閑とともに(四)純客観的に日本の特質を記述する日本精神論型の「ハ、芸術・技芸の領域に於けるもの」に分類されている。ちなみに(四)の「イ、思想的分野に於けるもの」には西田、田辺、和辻、井上哲次郎らが、「ロ、文学的領域に於けるもの」には久松潜一、阿部次郎、小宮豊隆、野上豊一郎らが、「二、国家・国体に関するもの」

には黑板勝美、辻善之助、大串兎代夫らが、「ホ、民族性に関するもの」には和辻、柳田謙十郎、松村武雄が挙げられている。

昭和十四年三月時点で田辺の日本音楽論は文部当局により「純客観的に日本の特質を記述する日本精神論型」として分類されており、「単に日本の優秀性を唱道する日本精神論型」とは異なるものと見られていた。しかし、先に見た通り昭和十四年十月の論文「国民音楽の指導性について」以降の田辺には神国思想の影響を受けた記述が明確に確認され、合理性を欠いた立論からは(三三)の「単に日本の優秀性を唱道する日本精神論型」に近づいたとも言える。

田辺は『続田辺尚雄自叙伝』(昭和五十七年十二月)の中で自らを「物理学者であり無神論者である<sup>65</sup>」としており、このことを踏まえれば昭和十四年以降の「我日本帝国は神国である」、「神州日本」といった発言は田辺の本心から出たものではなく、単に時局に阿る発言であったとも考えられる。

しかし、神国思想への傾斜が激しくなっていく中で書かれた昭和十八年六月の論文「文化戦争と日本音楽」で言及している音楽の「動物性」、「人間性」、「神性」について田辺は戦後の『音楽美の世界』(昭和二十六年四月)でも論じている。同書の中の「人間においては、善い音楽が繰り返して与えられれば、自然とその徳が磨かれて向上し、一歩々々神に近づいて行くのであつて、かかる音楽は己れが勝手に作り出したものではなく、神が人間を向上せしめようとして賜わつた恩恵の一つであると考えるのである<sup>66</sup>」という言葉は「無神論者である」という田辺の自己認識と整合しない。

また、『随筆集 音の響き』(昭和五十六年六月)に収められている随筆「邦楽と日本精神<sup>67</sup>」では、今日の青少年の大部分が過去の邦楽を棄てて、洋楽をもってこれに代えようとしていることを指摘しているが、ここで田辺は「日本人が千年以来絶えずその精神を培われていた日本音楽を突然捨て去って、これと縁のない外国の音楽をもってこれに

代えんとするは、正に日本精神の滅亡であり、日本国の滅亡である<sup>(85)</sup>と嘆き、これを防止するためには「今日の日本人に過去の日本音楽の美とその精神を理解せしめることが必要である」<sup>(86)</sup>と述べている。日本音楽に対する正しき理解を得させる必要があるという一念からこのような言につながっているものと考えられ、日本精神を徹頭徹尾訴える態度とは異なるが、田辺は日本精神という言葉を戦後になってから完全に封印したというわけでもなかった。

### 三 田辺尚雄が担当した日本文化講義

(一) 日本文化講義の講師選定の背景―田辺と文部当局との関係

ここではまず、田辺が日本文化講義の講師に選定された背景について述べておく。

昭和十一年（一九三六）年の夏に文部省思想局は文部省直轄諸学校に対し日本文化講義の講師選定に資するよう「日本文化講義講師表」という講師一覧を送付した。この講師一覧には歴史、哲学、教育、国文、芸術、法政、経済、自然科学の八分野に分けて百三十六名の講師の名前が記されており、田辺の名前も含まれていた。田辺は広義の専門が芸術、狭義の専門が音楽に分類され、官職については「東大文学部講師」と記されていた。

東京音楽学校への邦楽科の設置準備として邦楽を如何に教育すべきかを検討する文部省直属の「邦楽教育調査委員会」が大正十一年（一九二二）年十二月に設置され、田辺は委員として邦楽の統一楽譜を作る仕事を担当した。大正十二年一月には文部省社会教育課で蓄音機レコードの審査と推薦事業に携わる文部省嘱託の民衆娯楽調査委員に就いた。昭和四年四月に東洋音楽の研究で帝国学士院賞を授与されたことに加え、このような文部当局との関係が「日本文化講義講師表」の中に田辺の名前が入る理由の一つになったものと考えられる。



表紙に「昭和十七年五月二十七日」と書かれている教学局指導部指導課作成の「日本文化講義諸講習会講師一覧（事務参考用）」に記載された三百八十名の講師の中にも田辺の名前は入っており、広義の専門は文学芸術関係、狭義の専門は音楽、官職は東大講師と記されていた。本稿のはじめに述べた通り文部当局作成の資料で把握できる昭和十一～十六年度に文部省直轄諸学校で日本文化講義を二十八回担当した事実から見れば、講師一覧に田辺の名前が入るのはむしろ当然であろう。

田辺は昭和十四年十月二十一日に日本諸学振興委員会第一回芸術学会で公開講演を行い、十六年に文部省直轄の研究機関であった国民精神文化研究所の芸術科（芸術学・芸術史）の音楽研究嘱託に任じられ、同研究所が組織する特別研究会の芸術問題の構成員となった他、昭和十九年には日本諸学振興委員会芸術学部専門委員に就くなど、文部当局との関係は継続していた。

文部当局及びその関係機関による編集・発行の刊行物への執筆も、①『日本精神と音楽』（『国民精神作興叢書』第八輯、文部省、昭和十三年三月）、②『日本音楽の本質』（教学局編纂『日本諸学振興委員会研究報告』第六編芸術学、内閣印刷局、昭和十五年三月）、③『日本音楽の真髓』（教学局編纂『教学叢書』第八輯、内閣印刷局、昭和十五年三月）、④『日本音楽と西洋音楽』（国民精神文化研究所編『国民精神文化講演集』第八冊、昭和十七年八月）、⑤「明治以後に於ける邦楽の研究と教育との関係に就て」（『国民精神文化』第八卷第二号、国民精神文化研究所、昭和十七年二月）、⑥「大東亜と音楽」（『教学叢書』第二二輯、教学局、昭和十七年三月）、⑦「大東亜音楽の建設」（『日本諸学』第四号、日本諸学振興委員会、昭和十八年十月）と七度に及び、田辺は文部当局と深い関係を有していた。

(二) 田辺担当の日本文化講義の一覧とその分類

文部当局がまとめた日本文化講義の実施状況一覧等で把握できる田辺が担当した日本文化講義の回数は既に述べた通り二十八回であるが、これらも含め筆者は現時点で後掲の一覧表の通り昭和十二(一九三七)年度から十八年度までに田辺が日本文化講義を三十五回担当したことを確認している。

講義の演題には若干の異同があるものの、ここでは①現代日本の文化と音楽、②日本音楽の変遷、③日本精神と(日本)音楽、④日本音楽の真髓、⑤日本を中心とする東洋音楽の系統、⑥日本を中心としたる(大)東亜音楽の六つに分類しておく。

田辺が担当した三十五回のうち演題の不明分を除けば、①と②が各一回、③が十一回、④が八回、⑤が十一回、⑥が二回となり、田辺が担当した日本文化講義は基本的に③～⑥の演題に集中していた。

東海国立大学機構大学文書資料室が所蔵する簿冊「自昭和十四年度至同十六年度日本文化講義ニ関スル書類教務課」(識別番号：12014002616)には名古屋高等商業学校が昭和十五年十月三日に田辺を招いて日本文化講義を実施するに当たり田辺と名古屋高商との間で交わされた往復書簡が綴られている。その中の一つである昭和十五年七月二十日付けの名古屋高商校長・国松豊宛て田辺書簡の文面は次の通りである。

十七日附ノ御手紙拝見仕候。

日本文化講義ノ件、来ル十月三日午后一時ヨリト御決定ノ由承知仕候、当日朝御地着ノ汽車ニテ参上可仕候、当日夜御地発ノ汽車ニテ帰京仕度存居候、

講義題目ハ左ノ三ツノ中ニ於テ御撰定被下度願上候、

○ 日本精神ト音楽

【表】田辺尚雄が担当した「日本文化講義」一覧

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1							
十五					十四				十三						十二			年度	学校名	実施期日	時間数	演題	分類	講師官職	典拠	
名古屋高商	新居浜高工	大阪帝大	新潟	四高	同志社女子専門・ 高等女学部	富山薬専	東京女子大	水戸高校	宮崎高農	東京農教	浦和高校	神戸高工	山形高校	五高	七高	高岡高商	東京帝大理学部	横浜高工	東京帝大講義	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	典拠
十月三日	六月二十四日	六月二十一日	六月八日	五月八日	一月十七日	十一月二十八日	十一月十八・二十四日	十一月十七日	五月二十九日	二月三日	十一月二十五日	十一月七日	九月二十三日	五月十三日	五月十一日	一月十四日	十一月二十五日	六月七日	五月二十七日	五月二十七日	二	日本精神ト音楽	③	東京帝大講師	B	
二	三	三	三	三	未記載	二・三〇	三・三〇	二	二	三	二・三〇	四	二	二・三〇	四	三・四〇	二	二	二	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	
日本音楽ノ真髓	日本精神ト音楽	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	東洋音楽ニ就テ	日本精神ト音楽	日本ヲ中心トシタル東洋音楽ノ系統	日本音響(楽)ノ真髓	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	音楽ヨリ見たル日本精神	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	日本精神ト音楽	日本精神ト音楽	日本精神ト音楽ニ就イテ	日本精神ト音楽ニ就イテ	日本精神ト日本音楽	日本音楽ノ変遷	日本精神ト日本音楽	現代日本ノ文化ト音楽	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	
④	③	⑤	⑤	⑤	⑤	③	⑤	④	⑤	③	⑤	③	③	③	③	③	②	③	①	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	
東京音楽学校講師	東京帝大及び	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	理学博士	東京帝大講師	未記載	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	未記載	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	東京帝大講師	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	
I	H	H	H	H	G	E	F	E	E	C	C	D	C	C	C	B	B	B	A	五月二十七日	二	現代日本ノ文化ト音楽	①	東京帝大講師	A	典拠

21	東京女高師	十一月七日	三	日本音楽ノ真髓	④	國學院大教授及び 東京帝大講師	H
22	東京商大	十一月八日	二・三〇	日本音楽ノ真髓	④	東京音楽学校講師・ 東大教授〔講師〕	J
23	和歌山高商	十一月二十日	三	日本音楽ノ真髓	④	東京帝大講師	H
24	鳥取高農	十一月二十九日	三	日本音楽ノ真髓	④	東京帝大講師	H
25	三高	六月五日	三	日本ヲ中心トセル東洋音楽ノ系統	⑤	東京帝大講師	K
26	山口高校	六月六日	二	日本音楽ノ真髓	④	東京帝大講師	K
27	室蘭高工	六月三十日	二	日本ヲ中心トスル東洋音楽ニツキテ	⑤	東京帝大講師	K
28	東京美術	十月四日	二	日本ヲ中心トシタル東洋音楽	⑤	東京帝大講師	K
29	松本高校	十月七日	二	日本ヲ中心トセル東洋音楽	⑤	東京帝大講師	K
30	松山高校	十一月十二日	二	日本音楽ノ真髓	④	東京帝大講師	K
31	東京高蚕	十二月六日	二	日本精神ト音楽	③	東京帝大講師	K
32	東京高農	一月十五日	二	日本精神ト音楽	③	東京帝大講師	K
33	上田蚕専	二月二日	二	日本ヲ中心トシタル東亜音楽	⑥	東京帝大講師	K
34	成城高校	九月十一日	未記載	未記載	-	未記載	L
35	石川師範	一月二十四日	四	日本を中心としたる大東亜音楽	⑥	東京帝大講師・ 教学錬成所囑託	M

(典拠の記号) A…『教学局時報』第二号(昭和十二年十月)、B…『教学局時報』第七号(昭和十三年十月)、C…『日本文化講義実施状況一覽(昭和十四年二月十日迄)二報告アリタルモノ』(昭和十四年二月)、D…『神戸高工新聞』第一一七号(昭和十三年十二月十日)、E…『日本文化講義実施状況一覽抄録』(昭和十五年二月・教学局指導部指導課)、F…『東京女子大学々報』第一五号(昭和十四年十二月二十一日)、G…『同志社々報』第一六五号(昭和十五年一月二十日)・『同志社高等女学部新聞』第二〇号(昭和十五年三月)、H…『昭和十五年度日本文化講義三閱スル書類(名古屋高商)』(昭和十五年三月五日迄)二報告アリタルモノ、I…『自昭和十四年度 至同十六年度 日本文化講義三閱スル書類(名古屋高商)』(昭和十五年十一月二十五日)、J…『昭和十六年度日本文化講義実施状況』(教学局指導部指導課)・L…『成城だより』第一八号(昭和十七年十月)、M…『昭和十八年度第七類学事統計及報告書類』第八類研究及補助関係書類 第十一類雑件書類 石川師範学校教務課(金沢大学資料館所蔵)

○ 日本音楽ノ真髓

○ 日本ヲ中心トセル東亜音楽ノ系統

当日ハ蓄音器レコード多数ヲ使用仕度候故、恐入候へ共、会場へハ蓄音器（普通ノモノニテ宜シ）一台御備付置被下度願上候、

レコードハ凡テ当方ヨリ持参仕候、

先ヅハ返事迄 敬具

七月二十日

田辺尚雄

名古屋高等商業学校長 国松豊様

先に見た通り田辺の日本文化講義の演題が③④⑥に集中しているのは、日本文化講義を依頼してきた各校に対し演題の指定が特にない限りは田辺がこのように三題の中から演題を選ばせていたという事情があるためと見られる。

「日本を中心とせる東亜音楽の系統」という演題はそれ以前の「日本を中心とせる東洋音楽の系統」を改めたものと推測されるが、昭和十六年度にも「日本を中心とせる（とする、としたる）東洋音楽（の系統）」という演題で日本文化講義が実施されていたことを考えると、「東洋音楽」と「東亜音楽」とで講義の内容に大差はなかったものと見られる。<sup>(7)</sup>以下では筆者による資料調査でこれまで確認できた実施事例資料を用いながら田辺の日本文化講義が具体的にどのような内容であったのかを見ていきたい。

(三) 実施事例資料に見る田辺の日本文化講義

① 現代日本の文化と音楽

昭和十二(一九三七)年五月二十七日に東京高等工芸学校で「現代日本の文化と音楽」という演題にて行った講義が田辺が最初に担当した日本文化講義である。しかし、現時点で確認できる限り、その後これと同じ演題で行われた日本文化講義はなく、どのような内容の講義であったかを示す資料は得られていない<sup>(1)</sup>。この前後の年を含め、「現代日本の文化と音楽」という題目もしくはこれに近い題目の論文や講演録は確認できておらず、この演題で実施した田辺の日本文化講義の内容を掴む手掛かりは現時点では得られていない。

② 日本音楽の変遷

この演題で実施された田辺の日本文化講義は昭和十二(一九三七)年十一月二十五日に東京帝国大学理学部で行われた講義のみである。

〈実施事例資料一〉

【資料名】

『理学部会誌』第十六号(東京帝国大学理学部会、昭和十二年十二月、国立国会図書館所蔵)

※同誌の「講演記事／公演係りから」に「更に十一月廿五日田辺尚雄氏の日本音楽についての講演並に宮城道雄氏の演奏を行ひ、事変下に新興日本音楽の正しい認識を増し、同時に気持のよい音楽会として、会員に歓迎された模様である。田辺氏の講演は大略左の通りである<sup>(2)</sup>」と講義内容が二頁余りにわたり紹介されている。ここでは紙幅の都合上、

記事の要約を以下に示す。

【記事の要約】

一般のことはとても時間がなく、いわゆる三曲について、その歴史についての学説の新しい所を紹介します。

まず尺八について。今まで伝えられた尺八渡来の説はすべて誤りもしくは捏造であったということが最近明らかにされた。我が国で最も古い尺八は正倉院にあるもので、これは唐の呂才が、雅楽に合せるために改造したものである。これはその後日本においては平安期に入ってから、支那では唐の末には亡んで用いられなくなった。こうして最も古い尺八は支那でも日本でも亡んだのに今のはいかなる源を有するのか。従来の誤った説は徳川中期の『虚鐸伝記国字解』が伝えるものであるが、そもそもこの本がいんちきであった。今の尺八の起源は遠い昔、ナイルの畔に発していることが調べられている。

だいたい縦に吹く笛は古くから西アジアにあり、これがエジプト、アラビアと伝えられ、ここでは主に葦で作られた。正倉院にあるものは、調べたところによると長さは、一尺四寸五分から一尺二寸ぐらいまであるけれどもすべて支那の七声になっている。これは西洋の系統ではない。更に南方ジャワを経たものについては、ジャワに現在あるものと日本にあるものとで韻律は全く一致する。恐らく一節切という形式で九州から伝来したと思われる。

琵琶は琴とともに合奏として支那の王室より我が皇室へ伝えられ、また一方独奏楽器として九州の民間に伝えられていたが、壇の浦の敗戦後、九州に落ちた平家の人の手によりこの両者が九州に共存することになり、雑然と存在していた。

いったい信長の時代には尺八、琴、琵琶において一大変革が行われそうであったばかりでなく安土にはピアノが輸入され、その奏手として十八九才の少年が驚嘆すべき上達を示したと宣教師の手記にある。このような一大飛躍の態

勢も鎖国の鉄鎚の下にあえなく潰え、わずかに旧態を辛うじて保存するだけで徳川三百年を過ごしたことは全く遺憾至極である。しかし、最近では宮城さん等の手により着々と日本音楽再建設が進められるのは嬉しいことである。総じて建設と破壊とは異なる。

いやしくも建設進歩というものは歴史の基礎の上のみ作られるもので、徒らに古きを壊り、新しきを誇り足許を顧みない最近のいわゆる新日本音楽の行き方は慨嘆に堪えない。

#### 〈講義内容の考察〉

東京帝大理学部という田辺の出身大学・学部での講義という事情もあったのか、この時に田辺が担当した日本文化講義は三曲について誤った説を正し、新しい学説を紹介するというかなり専門的な内容であった。日本文化としての日本音楽あるいは日本精神の視点から見た日本音楽というような内容ではなく、この点で田辺のその後の日本文化講義とは趣が異なっている。

そこにはこの講義がそもそも東京帝大内では日本文化講義として実施されなかったという事情がある。『理学部会誌』の記事の中には日本文化講義という言葉は登場しない。東京帝大では文部当局に対し日本文化講義として報告しているながら学内には日本文化講義という名称ではなく、時局講演会として実施していたためである。『帝国大学新聞』第六八九号（昭和十二年十月十一日）は第一一面で「映画をも動員して時局認識を徹底化」との大見出しを付け、日本文化講義が時局認識に重点を置いて実施される予定であることを報じており、同記事中で示された時局講演会予定プラン三十四の演題・講師に田辺の名前も入っていた。

時局講演会として行われたために講義を行う田辺としても他校での日本文化講義とは異なり、日本文化や日本精神ということを意識せずに行うことになったものと考えられる。



③ 日本精神と（日本）音楽

「日本精神ト日本音楽」、「音楽ヨリ見タル日本精神」、「日本精神ト音楽ニ就イテ」など演題に若干の異同はあるが、「日本精神」という言葉を演題に入れた日本文化講義を田辺は昭和十二（一九三七）年度から十六年度までに十一回行った。これらの田辺の日本文化講義のうちここでは資料がある、昭和十三年九月二十三日に山形高校で行なわれた講義（実施事例資料二）と昭和十三年十一月七日に神戸高等工業専門学校で実施された講義（実施事例資料三）について内容を見ていく。

〈実施事例資料二〉

【資料名】

『帝国大学新聞』第七三四号（昭和十三年十月三日、第八面）

※記事には「角笛高し旋律の秋／田辺尚雄氏／日本音楽を語る」と見出しが打たれていた。以下に記事の一部を示す。

【記事の一部】

【山形】 秋季第一回文化講義は、廿三日東京音楽学校講師田辺尚雄氏に依り「日本精神と音楽」と題して行はれた、田辺氏は大学物理科出身ではあるが、夙に日本音楽史の造詣深く、又新日本音楽の実践家としても著名であるが、果せる哉期待以上の名講義であった、氏は日本の音楽史を四期に分ち一々レコードを用ひて説明された、即ち、日本を中心とせる東洋音楽の系統を明かにされたのであつて、日本の古代に於ける音楽に近いものとして、南洋諸島土人の音楽を聴かせ、或は遠くペルシア・印度の音楽、珍らしいものとして台湾蛮人の歌など、実に興味深いものがあつた、就中音楽史研究の傍に得られた語源の科学的研究等は、氏の教養の広さを物語るものであり、遂に予定より三十分を

超過するも漸く半ばを終るのみであつた（以下、略）

〈実施事例資料三〉

【資料名】

『神戸高工新聞』第二一七号（昭和十三年十二月十日、第二面）

※文部当局作成の昭和十三年度の実施状況一覧には記載されていないが、『神戸高工新聞』で報じられたこの記事により実施が確認できた。記事には「文化講義／日本精神と音楽に就いて／講師 田辺尚雄先生」と見出しが打たれており、その全文は次の通りである。

【記事の全文】

本年度第三回文化講義は去る十一月七日午前講堂に於て行はる、講師は本邦音楽界の泰斗田辺尚雄氏で、「日本精神と音楽」と題して、第一時限より四時間休みなしに現在我国に於ける音楽、特に最近注目されるに至つた邦楽に就いて、レコードを参考資料に入れ、吾々技術家にとつて、往々疎遠になり勝ちな情操教育の最も重要な部門を占める音楽を、わかり易く説かれた、お話の要点を略記すれば、日本音楽の発達程序の本然的なものと、殊にその中に含まれた種々の特長を強調され、日本人の生活との不即の関係を述べ、同時に日本人の同化性の音楽史に表れた相を曲及楽器等に実例を以てし最後に此の輝かしい歴史と、内容を有する日本音楽の余りにも現在生活に遠ざけられてゐる事実に對して此の正しい發達に資するの態度を持する事こそ、現在人にとつて大切な事であると結ばれた

延々四時間の長講演にか、はらず、先生は些かの疲れも見せられず最後まで堂々その蘊蓄を吐露され、生徒も先生の詳細に且安易な講演調と現在文化人の緊要事なる演題に魅せられたかの如く耳を傾けた。

〈講義内容の考察〉

先に見た昭和十五年七月二十日付けの名古屋高商校長・国松豊宛て書簡で田辺は蓄音器の準備を依頼していたが、実施事例資料二、三のいずれもが田辺が実際にレコードを用いて講義を行ったことを伝えており、田辺の日本文化講義はその場で直接音楽を聴かせるといふ具体性に富む内容であったことがわかる。

いずれの資料も演題の紹介以外では「日本精神」という言葉は登場せず、日本音楽を中心にした講義であったことはわかるが、日本精神について田辺がどのように話したかはこれらの資料だけでは掴めない。なお、実施事例資料二にある「日本を中心とせる東洋音楽の系統を明かにされた」という説明からは「日本精神と音楽」という演題の日本文化講義でも田辺は（後述する⑤の）「日本を中心とせる東洋音楽の系統」と内容的に同じことを話していた可能性があることが示唆される。

#### ④日本音楽の真髄

この演題の日本文化講義を田辺は昭和十二（一九三七）年度から十六年度までに八回担当したが、ここでは昭和十四年十一月十七日に水戸高校で実施された講義（実施事例資料四）、昭和十五年十月三日に名古屋高等商業学校で実施された講義（実施事例資料五）、昭和十五年十一月八日に東京商科大学で実施された講義（実施事例資料六）の内容を見ていく。

〈実施事例資料四〉

#### 【資料名】

『帝国大学新聞』第七七八号（昭和十四年十一月二十七日、第八面）

※「講演会たより／田辺尚雄氏」という見出しが付けられた記事であり、その全文は次の通りである。

【記事の全文】

【水戸】第二学期最後の日本文化講義は十七日東大講師田辺尚雄氏を招いて「日本音楽の真髓」なる演題で行はれた、氏は種々珍しいレコードを聞かせつゝ、日本音楽の優秀性を説いたがその真髓として外国音楽が分析的であるに比して日本音楽は総合的であり文学、演劇への結びつきが緊密であり、楽想が道義的、静思的であるといふ三点を挙げて二時間半の講演を結んだ

〈実施事例資料五〉

【資料名】

昭和十六年五月二十二日起案「昭和十五年度 第三回日本文化講義実施之件」 教学局指導部長宛文書（東海国立大学機構大学文書資料室所蔵の簿冊）「自昭和十四年度至同十六年度 日本文化講義ニ関スル書類 教務課」（識別番号… 120140002616）所収）

※昭和十五年十月三日に名古屋高商で田辺が行った日本文化講義に關し名古屋高商が教学局に報告した文書である。しかし理由は不明ながら、文部当局が作成した昭和十五年度の実施状況一覽にはこの講義は記載されていない。この資料では田辺の講義の要旨が以下の通り記されていた。なお、生徒に与えた影響について名古屋高商は教学局に対し「我国ノ音楽ハ諸外国ニ比シテ決シテ劣ル所ナキヲ認識シタルモノノ如シ」と報告している。

【文書に記された講義要旨】

一、音楽ハ平和時代ニ於テノミ需メラルベキモノデ戦時ニハ不必要ナモノデアル様ニ思ハレルノデアアルガ潜水艦ノ乗組員ニトツテハ音響ヲ聞キ分ケル上カラ音楽ノ素養ハ大切デアアルコトガ認メラレテ居ル。

一、往事ハ音楽ト云ヘバ只個人ノ為ノモノガ尊重セラレタガ今日ハ世界ハ民族意識ニ目覺メ何レモ民族トシテノ音楽

ヲ要求シテ居ル状態ニアル。何レノ民族ニ於テモ夫々独得ノ民族性ガアリ独逸、仏蘭西、日本夫々異ルモノガアル。我等ハシヨパン、ペートーベンノモノヲ知ツテ之ヲ満足スベキデハ無ク音楽ニ於テモ独得ノモノガアツテ然ルベキデアアル。

一、我国ノ音楽ハ他国ノモノト比較シテ如何カト云フニ、他二見ラレナイ優レタモノガアルノニ之ヲ一般人ハ知ラナイ。日本刀ノ本当ノ価値ヲ知ラナイ者ガアルト同様デアアル。打楽器デアルベキ三味線ヲ弦楽器ト見テ貧弱ナモノデアルト云フハ西洋流ノ批評者ノ云フ所デアアル。之デハイケナイ。

一、人間ハ素直デナケレバ本当ノ良イ仕事ハ出来ナイ。人間ノ精神ヲ浄化スルニ役立つハ音楽デアアル。此ノ音楽ヲ面白イカラヤルノデハ奴隸ノスルコトデアツテ、音楽ハ人間ノ魂ヲ清クシ軟ゲルタメノモノデアアル。豹ヲ除イテハ如何ナル猛悪ノ動物ト雖モ音楽ニヨツテ心ヲ軟ゲルモノデ印度ノ毒蛇ヲ音楽ニ合セテ踊ラシメルモ此ノ現レノ一ツデアアル。

一、西洋ノ音楽ニ就イテ十八世紀ヨリ十九世紀ニカケテ音階ガ四ツ多クナリ之ノ調和ガ大切デアツタ然ルニ近代トナツテ此ノ調和ガ反对トナリジャス等ガ出来タガ、之ハ不安定ナ状態ニアルモノデ国民ノ性情ノ不安定ノ状況ヲ如実ニ示シタモノデアアル。民族意識ガ強固ノ時ニハ音楽ニ於テモ極安定スルモノデアアル。

一、日本ガ日支事變四年ヲ経テモ国力ノ劣〔衰〕ヘナイ事ハ世界ノ驚異ノ的トモナツテ居ルガ、之ハ日本ガ一大家族ヲナシテ居ル為デ、外国ニ見ル個人ノ上ニ国王ナリ、大統領ナリガアル国デハ本当ニ我国ノコトハ解ラナイ。音楽ニ就テモ我国ノ音楽ハ家庭的ノ音楽ヲ發展セシメテ居リ、外国ノ夫ハ個人主義の音楽ト云ツテ良イ。

一、或人ハ日本ノ音楽ハ全部外国カラ来タモノデ独得ノモノガナイト云フガ、日本ノ音楽ハ我民族ノ歴史ノ上ニ存在シテ居ル音楽デアツテ、我国ノ音楽ノ良處ハ日本ノ歴史ヲ見テ云フノデナケレバ本当ノ価値ハ解ラナイ。之コソ

日本ノ音楽ノ特殊性デアツテ只形ノ上丈デハ解ラナイ。

一、我国古来ヨリ接触シタ文化ヲ採リ入レ、我国民ノ性格ニ合フモノ以外ハ之ヲ捨テ、イル。然モ此ノ採リ入レタルモノハ之ヲ日本化シテ優秀ナルモノトシテ居ル。音楽ニ於テモ全ク此ノ例外トハナツテ居ナイ。今日日本ニ於テハ西洋音楽ヲ採リ入レテ居ルノハ研究ヲシテ居ルノデアツテ他日之ハ必ズ日本化シタ優レタモノトナルコトハ必至デアル。或独逸人ハ日本ノ音楽ヲ研究シテ之ヨリ世界第一ノモノデアルトノ結論ヲ得タ。即チ我国ノ音楽ハ魂ノ力ガ這入ツイテイルト云フノデアル。

一、日本人ハ音楽ニ就テハ優レタ能力ヲ有シテ居ル、劣ツテイルト思ハレテ居ルノハ教育方法ガ良ク行ハレテ居ナカッタカラデアル。西洋人達ハ日本ノ音楽ハ他ノ芸術ニ来伝セラレテ分化ヲシテ居ナイカラ劣ツテ居ルト云フガ、我国ノ音楽ハ文学、演劇等ト綜合的ナモノトシテ偉大ナル発達ヲ遂ゲテ居ル。

一、日本人ハ世界デ綜合的芸術ヲ理解シ、之ヲ作り出ス能力ガアル〔。〕之ヲ本当ニ發展サセル必要ガアル。之ガ我等日本人ノ責務デアル。我国人ノ音楽ヲ觀ルノト西洋人ガ之ヲ觀ズルノトハ考ヘガ違ツテイル。西洋デハ音楽ニ携ル者ハ只良ク合ハセヤウトノミスルノガ基礎トナツテイルガ、日本人デ音楽ニ關係スル者ハ之ヲ演ズル場合ニハ真劍勝負ニ臨ム時ト同様ナ心胆デ対シテ居ル。此ノ心ガ本当ニ音楽ヲ純化スルニ役立ツモノデアル。之ガ日本人ノ芸術ニ対スル心持デアル。我国ノ音楽ハ決シテ世界ニ比ベテ劣ツテ居ルノデハナイ。今ハ研究ノ時代デ、本當ノ偉大ナル音楽ガ世界ノ長所ヲ採ツテ誕生スベキ道程ニアルモノト称スベキデアル。

〈実施事例資料六〉

【資料名】

『二橋新聞』第三一八号（昭和十五年十一月二十五日、第二面）

※文部当局作成の昭和十五年度の実施状況一覧には記載されていないが、『帝国大学新聞』第八三一号（昭和十五年十一月十一日）と『一橋新聞』第三一八号の記事から東京商大で田辺が日本文化講義を担当したことが確認できた。

「日本音楽の真髓／田辺東大教授の講演」という見出しを打った『一橋新聞』の記事の全文は次の通りである。<sup>74</sup>

【記事の全文】

去る八日午後一時から兼松講堂で音響学の権威東大教授工学博士田辺尚雄氏を招き、同氏はレコードに依つて解説しながら、『日本音楽の真髓』と関する左の如き講演があつた

今日の人は西洋音楽はよく知つてゐるが、日本音楽に対する理解に欠乏してゐるやうである、一体昔の日本は決して野蛮国ではなかつた、のみならず多くの立派な音楽がいくらかもあるのである

それでは日本音楽は何であるかと言ふに、日本人の作つた音楽だから日本音楽とは限らない、『カツポレ』の如きはその良い例である、要するに西洋音楽か日本音楽かは楽器の問題ではなくて、琴なども朝鮮、アツシリヤあたりから伝来したものである

尺八はアラビヤから支那に入り之は一尺八寸よりずっと長くアラビヤ人は之を斜に置いて吹いたが、支那に来てから八寸になり日本で一尺八寸になつたのである、斯の様に今日日本本来のものと信ぜられてゐるものも実はさうではなく、長い間に日本風になつたのである

それに反してピアノ其の他の洋楽器は日本人の生活感情に順応するに歴史が浅いやうに思はれる

然し以上の様な考へ方は素人のする事で、専門家はオクターブによつて音楽を日本風と西洋風とに区別する

さて此の日本風の音楽——詰り日本音楽とは何ぞやと言ふ最初の課題に返れば、それは日本の歴史に相当の長い期間存在してゐたものでなくてはならない、そして日本の国民的感情に順応したものが、日本音楽と呼ばれる可きであ

る

〈講義内容の考察〉

東京商大での昭和十五年十一月八日の日本文化講義を伝える実施事例資料六の記事はカツボレ（かっぱれ）や尺八の伝来など具体的な内容に言及しているものの日本音楽に対する理解の必要性や、日本音楽とは日本国民の歴史に基づいて作られた音楽であるという田辺の持論の一部しか紹介していない。これに対し実施事例資料四からは、西洋音楽Ⅱ分析的、日本音楽Ⅱ総合的という、安岡正篤の東西文化論の影響を受けた昭和六年以降の田辺の日本音楽論が昭和十四年十一月十七日の水戸高校における日本文化講義にも反映されていることや、同校で田辺が日本音楽の優秀性を説いたことを確認できる。

また、実施事例資料五の昭和十五年十月三日の名古屋高商の講義要旨からは、日本精神、国民精神という言葉こそないものの、田辺の講義は日本音楽が世界の音楽に比べ劣っているものではないことを強調するものがあったことがうかがえる。内容的には、音楽は人間の精神を浄化するものであること、日本音楽は西洋音楽を採り入れ研究して必ず日本化し優れたものとなることは必至であること、日本音楽は文学、演劇との総合的なものであること、日本音楽は魂の力が入っていることなど、昭和十五年までに形成された田辺の日本精神論的音楽論が名古屋高商での日本文化講義にもそのまま反映されていた。

⑤ 日本を中心とする東洋音楽の系統

「東洋音楽」という言葉が演題につき日本文化講義を田辺は昭和十三（一九三八）年度から十六年度までの間に十一年行なったが、ここでは女子専門学校であった東京女子大学で昭和十四年十一月十八・二十四日に行った講義（実施



事例資料七」と昭和十六年六月三十日に室蘭高等工業学校で行った講義（実施事例資料八）を見ていく。

〈実施事例資料七〉

【資料名】

『東京女子大学々報』第二五号（昭和十四年十二月二十一日、第四面、東京女子大学所蔵）

※「学園消息」欄に「第二回文化講演／田辺尚雄氏」という見出しで書かれた記事の全文は次の通りである。

【記事の全文】

「日本を中心とした東洋音楽の系統」

十一月十八日、二十四日の二回に互り、日本音楽の概念、その「の」發達史及び将来に於ける日本音楽の進むべき方向等に付き、レコードを以て詳細に説明された。日本文化の再検討が色々の方面から願望されてゐる現在、科学的根拠の上に立脚し、併も具体的に実例を以て一々之を實証せられ、日本音楽の本質を明らかにせられた示唆に富んだこの講演は、単に日本音楽一個の問題ではなくして、日本文化全般に付いて深く考へさせられた。

〈実施事例資料八〉

【資料名】

『日本文化講義』第四輯（室蘭高等工業学校生徒課、發行年月日は未記載、室蘭工業大学附属図書館所蔵）

※田辺が昭和十六年六月三十日に室蘭高等工業専門学校で行った日本文化講義の講義録を収録した小冊子であるが、三十六頁に及ぶため、以下ではその内容を要約して示す。

【講義録（小冊子）の要約】

日本の音楽のを中心にして色々東洋各国の關係を話していきたい。まず、最近の学生は西洋音楽についてはよ

く知っているが、日本の音楽については何一つ知らない。日本の音楽のことを多少知ってもらうため三味線を例に取  
り説明しよう。三味線は撥で皮を敲くため打楽器の一種である。西洋のギターのような絃楽器が人間の感情・情緒を  
出すものであるのに対し三味線は人間の魂の力を出すものである。ドイツ人のアルフレート・ウエスタール（講義録  
では「アルフレッド・ウエストハーブ」と表記）は日本が音楽で世界第一だという論文を出して博士になったが、彼  
は魂の力を表現することが音楽の最も重要なことであり、それを真に出し得る音楽は日本の音楽だと言った。

次に日本音楽とは何であろうか。まず、今日日本人は世界の音楽は何でもやるゆえ、日本人がやるから日本音楽と  
は言えない。日本人が作曲したから日本の音楽とも言えない。また、日本で根本から発明された楽器は一つもないた  
め、三味線や尺八などで演奏するのが日本音楽であるとも言えない。更に陰旋法は日本でできたものではないため、  
音階により日本音楽であるとも言えない。結局、二千六百年の間日本国民の歴史の中にずっと発達をして来た音楽、  
これが即ち日本音楽であり、このことは絶対に間違いない。

アリストテレスの『政治哲学』は体育と音楽の教育を重んじていた。音楽というものは人間の徳を高めるものであ  
る。ヨーロッパの近代音楽はベートーヴェンを除けば大部分奴隷の音楽つまりは人を慰め楽しませるだけの音楽であ  
るのに対し、日本の音楽は真の魂の音楽である。例えば義太夫の中には必ず高い国家的理想が入っている。

日本の音楽は世界の文化がみな採り入れてあり、決して排斥しないのが日本民族の優れた点である。日本では昔か  
ら世界各国の文化を採り入れて研究しており、中国の三味線と比べ日本の三味線は変化が多く複雑であり、また、ア  
フガニスタンの尺八と比べ日本の尺八は複雑である。このように日本人は楽器の技術も高く、外国の文化を消化する  
力が強い。

浄瑠璃、能楽、平家琵琶、薩摩琵琶はみな声明という仏教のお経から出たものであり、雅楽から出たものではない。

だいたい日本のお経の譜の元はみなベルシアから来ている。インドのお経、ベルシアのお経、日本のお経をレコードで聞いてもらうが、日本のものが気品が高いことがわかると思う。

次に極めて重要な雅楽の話申しあげたい。雅楽とは雅にして正しい音楽すなわち雅正の音楽である。国家観念を養成するには音楽が一番良く、民族の思想を養成するにも音楽が良い。フランスの音楽はご機嫌取りの奴隷の音楽になっており、フランスが敗れるのは当然である。またいよいよアメリカが参戦するであろうが、アメリカの最近の音楽は非常に正確な機械的なものであり、敵の前で平然と命を捨てようということは考えず、機械でもって戦をさせようと思つてゐる。これではアメリカ敗れたりだ。このように西洋の音楽は邪道に入ったことがわかる。世界の音楽を救うものは雅楽でなければならぬと思う。音が弱くてもしつかり人間の魂を掴む力が大事であり、これが雅楽である。雅楽は千年以前の日本人が外国の文化を採り入れて研究して創つたものであり、千年後の世界の人を敬服させるだけの理想をもつてした仕事であると考ええる。

西洋の音楽は複雑な音を出すけれども全部上から下まで一つであり、指揮者一人が指揮して時間が単純である。これに対して日本の音楽は三味線と唄をやつても同じではなく、シンコペーションがまるきり違い、時間が二重に進行している。日本の音楽は時間が二重に進行する芸術であり、日本は文学や演劇、音楽が総合されてきた偉大なる総合芸術を創つたのである。

舞踊の名人・芳沢あやめは舞台上で踊つている最中に隙の出た瞬間、剣術の先生から鉄扇を投げ入れられ、その瞬時に隙のない一つの踊りの手を考えた。<sup>76</sup>これが日本の芸術であり、武士の魂である。日本の音楽は哀調を持つており、それは極めて高い精神的な音楽であつて、武士道でできてゐる。このことをよく了解して頂きたい。音楽も毎日進んで行かなくてはならない。一番大事なことは新しい日本音楽を創ることである。結局日本の理想は何かと言えば、新

しい日本音楽を創ることである。楽器などはこの楽器を使ってもよく、結局世界的な新しい音楽を日本人から創り出して行くべきである。新しい偉大なる総合芸術を創るべきである。そのことを忘れないようにして欲しい。

〈講義内容の考察〉

実施事例資料七からは「日本を中心とせる東洋音楽（の系統）」という演題であっても田辺の日本文化講義の内容が演題通り日本音楽を中心としたものであり、日本音楽の本質を明らかにする内容であったことが読み取れる。

実施事例資料八からは田辺の講義内容を詳細に確認できるが、東洋音楽への具体的言及はさほど多くなく、田辺の日本文化講義はあくまで日本音楽を中心とした内容（その意味では演題通りの内容）であった。

田辺が室蘭高工で日本文化講義を担当したのは昭和十六年六月のことであるだけに、この時の講義は、日本音楽は世界第一であるとするウエスタールの所論の援用、日本音楽とは日本国民の歴史の中でずっと発達してきた音楽であること、音楽は人間の徳を高めるものであること、国家観念を養成するには音楽が一番良いこと、日本音楽が総合芸術であること、日本音楽が極めて高い精神的な音楽であり武士道でできていることなど、田辺がそれまでに展開してきた日本精神的音楽論の内容をくまなく反映したものであった。

他方で、「アメリカ敗れたり」といった時局を意識した発言はあるものの室蘭高工での日本文化講義の中で田辺は日本精神あるいは国民精神といった言葉は用いておらず、講義録を見る限りは神国思想が浸透した講義であるとの印象は持ち得ない。

⑥日本を中心としたる（大）東亜音楽

田辺は昭和十七（一九四二）年二月二日に上田蚕糸専門学校で「日本ヲ中心トシタル東亜音楽」という演題で、また

昭和十九年一月二十四日に石川師範学校で「日本を中心としたる大東亜音楽」という演題で日本文化講義を担当した。ここでは詳細な資料が残されている石川師範学校での講義（実施事例資料九）を取り上げる。

〈実施事例資料九〉

【資料名】

昭和十九年二月二十三日起案の教一三五号「第二回日本文化講義実施状況ニ関スル件報告」（金沢大学資料館所蔵の簿冊「昭和十八年度第七類学事統計及報告書類 第八類研究及補助関係書類 第十一類雑件 書類 石川師範学校教務課」（資料番号：200204070276）所収）

※この文書一式の中にある、詳細なる講義要旨、講師の講義状況、生徒の感想を以下に示す。これらは石川師範から文部当局への報告事項の一部である。また、終戦の約一年半前に行われた日本文化講義の内容を詳細に把握できるよう、これとは別の簿冊に綴じられていた速記録を翻刻し、本稿の附録に掲げた。

【文書に記された講義要旨・講師の講義状況・生徒の感想】

一．詳細なる講義要旨

大東亜建設の完遂には大東亜民族の精神的感情的融合が緊要不可欠の条件である而してその為には大東亜の音楽を再認識することが重要視されて来たのである。従来音楽の見方は西洋の方式を標準として評価したる為に日本音楽の如きは低級なものとして無視され来たのである。而してその誤解の要点概ね次の三点である。

即ち 1、単純幼稚、 2、室内音楽

3、花柳界に於て発達したる音楽

その誤解を吟味しつゝ、講話を進めよう、

## 一、音楽の三面（目的）

### 1、動物性

感情の慰藉鼓舞を目的とすることである、音楽によつて愉悦慰藉を感ずることは動物の共通性である  
音楽鑑賞コブラ使ひのブーンギー。

### 2、人間性

人間の持つ思想を表現することを目的とする。此の目的によれば作曲家によつてその音楽の価値を決定することになりこれは西洋の作曲第一主義を必然的に来らした原因となるのである。

### 3、神社〔性〕

人間の徳を高め神に近づかしむるを目的とするものである。これは日本音楽の目的であつて、技巧は日進月歩でそれによつて評価すべきでなく、曲は神によつて授けられたものであるから、演奏には全生命、精魂をこめて当り、魂を神に近づかしむるのが真の音楽であるとするのである。この意味で江戸時代の光崎檢校などは正に楽聖といふべく、その力作「秋風の曲」は日本の代表的傑作といふべきであらう

右によつて音楽はその目的によつて価値を判断すべく、曲の複雑単純によつて評価するは西洋音楽の誤れる見方によるものであるといふことが出来るのである。

## 二、大東亜音楽と近代西洋音楽

最高芸術としての音楽は洋の東西を問はず、狭い室内で行ふ方が真価が発揮されるものである。それは恰もピラミッドの、頂きになる程細くなるのと同様である。随つて我が国の四畳半の音楽は高度な芸術である証左でこそあれ、決して低級であるとは言ひ得ないのである。是に關聯して、帝大医科の一友人の興味深き研究がある〔〕そ

れは、発声中の口型をX線で高速度撮影して見ると西洋のはアーはアーで型が変わらずイーはイーで型が変わらないが、日本のはアよりイに移る間に非常に微妙な変化があるのである。云はゞ西洋の音楽は口の中の体操であり、日本の音楽は口の中の舞踊であると言ひ得る。これを以て見ても日本の音楽は芸術の最高点をねらつてゐることがわかる。但し、音楽の基礎として西洋式の合唱を取り入れることも必要ではある。

次に音楽の内容から見ると日本の音楽には恋愛を内容とするものは極めて少い。西洋の音楽は恋愛主義、享楽主義のものが多し。日本の音楽に於ては義理といふことが重要な条件となつてゐる。これ等は西洋のオペラと日本の浄瑠璃とを比較すれば明瞭である。かくて日本の音楽には確呼〔乎〕とした指導性があり、教育への深い暗示を持つものである。我が国の音楽は最高の芸術は道徳に一致するとの観点に立つてゐるのである。

以上によつて第三の誤解「日本音楽は花柳界に發達した」との見解は正しく認識不足、的外れの評であつたことが肯げよう。

### 三、日本音楽の精神

神武天皇御東征の久米歌、東歌などに感じられるごとく日本には已に上代より優れたる音楽が發達してゐたのである。而してそれは西洋の音楽の如く人を楽しませる為のものではなくて自分を高めて行くためのものである。西洋の音楽を奴隸の音楽と云ふならば日本の音楽は「魂」の音楽である。享樂的な西洋音楽には美点もあるが毒素も多く持つてゐる。その毒素に害されることを警戒せねばならぬ。

### 四、雅正の音楽

音楽は神に近づく為のものであるから正しくなければならぬ。由来、その国の音楽はその国の消長を計るバロメーターである。仏国滅亡前のV. Lullyの作曲の個人主義的なる米国の音楽の機械的なる、支那南方の快樂主義なる

を見れば思ひ半ばに過ぎるものがあらう。我が国の音楽は幾千年の間外国から渡来せるものが数多あつたにも不拘、その我が国の音楽として取入れられるや云ふに云はれぬ氣品を持ち莊嚴な音楽となるのである。越天楽の如き易いものに觀てもそれは肯けるであらう。これは日本の取入れ方がよかつた為である。

#### 五、大東亜共榮圏の音楽建設

音楽は魂を以て歌ふものでなければならぬ。大東亜共榮圏の音楽はその精神で建設さるべきものである。例へば印度の Dika の如く火となつて燃える体のものでなければならぬ。又瀬川菊之丞の舞踊の如く生命がけの芸術でなければならぬ。

芸術は神より授かつたものであり魂を打ち込んで演ずるものであつてこそ始めて世界を救ふことが出来るのである。大東亜の指導者たる日本はこの確固たる信念を以て東亜の音楽を慎重に研究し、健全なる音楽を建設し以て東亜の人心を感情を通して融合せしめねばならぬ。

#### 一、講師の講義状況

しみりとした口調を以て講師自身の録音蒐集にかゝる貴重なるレコードを使用しつゝ、敵性音楽に対する従来の盲目的崇拜態度の是正並に大東亜音楽の再認識と之が新建設への情熱を内にたぎらせつゝ、終始倦むことなく真摯なる態度を以て講演せられ聴取衆に多大の感銘を与へられた。

#### 一、生徒の感想

田辺先生の日本音楽に対する卓抜なる識見と真摯なる研究の成果をき、先生に対する無限の崇敬を抱くと共に西洋音楽と大東亜音楽との比較対照により大東亜音楽が何等の遜色なきことを理解することが出来将来真に日本精神を中核とせる大東亜音楽建設についての可能性を信じ音楽による融和により大東亜共榮圏建設のために邁進しよう



とする決意を一層鞏固にする事が出来た。

〈講義内容の考察〉

「日本を中心とした大東亜音楽」という演題ではあるが、インドの音楽の話はあるものの話の中心が日本音楽であった点ではこれまでの田辺の日本文化講義と同様である。

日本の音楽は魂の音楽であることや雅正の音楽についての話はいずれも昭和十六年六月三十日における室蘭高工での日本文化講義（実施事例資料八）でも述べられていたが、動物性、人間性、神性という音楽の三面は実施事例資料一〜八では確認できなかった内容である。この音楽の三面は本稿二（二）⑥で述べた通り、田辺の日本精神論的音楽論が次第に神国思想に傾斜していく中、昭和十八年六月の論文「文化戦争と日本音楽」で示されたものであり、昭和十九年二月に石川師範で田辺が行った日本文化講義も神国思想への傾斜を感じさせる内容になっている。このことは速記録（本稿附録参照）の終盤にある「昔からもつてゐる魂が日本音楽をさゝえ、保つて来たのであります。これがやがて世界を救つて行くのである。それが八絃一字と言ふものだと思つてをります」という言葉からも感じられる。

また、石川師範の日本文化講義は昭和十九年二月に実施されたということもあり、実施事例資料一〜八では確認できなかった大東亜音楽への言及があった。ただし、実施事例資料九の「詳細なる講義要旨」にある「大東亜の指導者たる日本はこの確固たる信念を以て東亜の音楽を慎重に研究し、健全なる音楽を建設し以て東亜の人心を感情を通して融合せしめねばならぬ」という言葉や、「生徒の感想」にある「将来真に日本精神を中核とせる大東亜音楽建設についての可能性を信じ音楽による融和により大東亜共栄圏建設のために邁進しようとする決意を一層鞏固にする事が出来た」という感想については些か疑問が残る。

確かに田辺は大東亜音楽を作る必要があること、日本が大東亜の各国と一心同体となつて指導せねばならないこと

を述べてはいるが、速記録を読む限りこれらの時代がかった硬い表現は用いておらず、石川師範による講義要旨や生徒の感想の方が大仰な表現になっている。講義時間の制約もあろうが、大東亜音楽の建設について田辺は詳しく語ってはおらず、生徒に「大東亜共栄圏建設のために邁進しようとする決意」を与えるような内容ではなかった。

同じく実施事例資料九の「講師の講義状況」には「敵性音楽に対する従来の盲目的崇拜態度の是正」という強い表現があるが、講義の速記録を見る限り田辺自身はそのような強い表現を用いておらず、「ベートーベンやいろいろの人のことについて詳しく知つてゐて日本のものをすこしもしらなかつた」くらいの言い方しかしていない。これらの点を踏まえると文部当局への提出ということを意識し、石川師範学校が敢えて時局に阿るような表現を用いた可能性も考えられる。

#### (四) 田辺の日本文化講義における日本精神と雅楽

昭和十二(一九三七)年度に東京高工芸や東京帝大理学部で行つた講義を除き田辺が担当した日本文化講義の演題は「日本精神と音楽」、「日本音楽の真髄」、「日本を中心とせる東洋(東亜もしくは大東亜)音楽(の系統)」の三つに集約されるが、その内容は基本的に田辺が展開してきた日本精神論的音楽論であり、演題の違いにより話す力点に差があるものの日本音楽を中心とした内容であるという点では大差のないものであった。

繰り返しになるが、田辺は日本精神論的音楽論を展開していき、昭和十四年以降、神国思想に傾斜していった。小冊子や論文では「日本精神」という言葉の登場は少なく抑制的であったが、『都山流楽報』に連載していた随想「天山莊楽談」では日本精神について多く言及し、「皇紀二千六百二年神軍譜」(昭和十七年一月)を作成するほどまでに神国思想への傾斜も見られた。

このことと比較すると、実施事例資料一―八を検討する限り、日本文化講義では小冊子・論文と同様に日本精神の強調を田辺はむしろ抑制していたのではないかと推察される。これまで見てきた通り日本精神や国民精神という言葉をも田辺は日本文化講義の中ではほとんど用いなかったようであり、学生・生徒が日本音楽への理解を欠いていることへの危機感から日本音楽の優秀性に触れることはあっても日本精神を鼓吹するといった内容の講義ではなかった。そこには二(二)⑤で述べた通り、日本精神を言葉により理論的に理解させるのは困難であり、実際に音楽を聴かせることで体得させるしかないという考えが田辺にあったためだと考えられる。

室蘭高工での昭和十六年六月三十日の日本文化講義でも神国思想への傾斜はほとんど確認できない。この点で、日本の伝統的精神として忠誠の精神を一貫して説き、その美しさを伝えようとした平泉澄、国体を前面に出し、日本は神国であつて皇統は神聖、尊厳、絶対というものを失われない血統であるという考えを示した山田孝雄、あるいは日本精神の真髓を神皇信奉であるとし天皇の臣民としての日本人の自覚の必要性を強調した大倉邦彦のような日本精神論者らが担当した日本文化講義と比べると、日本精神の高唱ということに対しては田辺の日本文化講義はかなり距離があった。その田辺も昭和十九年一月二十四日の石川師範での日本文化講義(実施事例資料九)では神国思想に傾斜した言説が見られるようになった。そこにはもちろん時局の影響もあつたであろう。

ただ、田辺の日本文化講義への思いは日本精神の発揚というよりは学生・生徒に対し日本音楽への理解を深めさせたいという一点に尽きていた。終戦後に出版された吉川英士『日本音楽の性格』(昭和二十三年三月)に寄せた「序」(昭和二十二年四月)の中で日本文化講義に触れてこそいないが、戦時期における自らの心の丈を田辺は次のように述べている。

現代の日本青年の多くは日本の音楽の真髓を知らない。西洋の音楽に就ては西洋人と同等の程度までよく知つ

て居る。然し自国の音楽文化の精神は殆んど一つも知らない。知つて居ると思つて居たことは多くは皆誤解のみであつた。斯かる文化形態は決して正しい国民文化ではない。然し其のことは国民の罪ではなく、之れを正しく教へなかつた教育制度の罪である。斯かる状態は我が国以外の如何なる外国にも全く見ることを得ない変態状態である。将来の我国の立ち場として、果して之れでよいのであらうか。

私は之れを憂ひて十年一日の如くに其の誤解を叫んで来た。然し世人の多くはそれを一笑に附して顧みなかつた。<sup>(29)</sup>

田辺が学生・生徒に伝えたかつたのは正に日本文化講義の演題にもしていた「日本音楽の真髓」であつたが、それは日本音楽に対する科学的な分析に基づく音楽論から外れ、日本音楽の精神といった必ずしも合理的に説明が可能なものを持ち込むことにもつながつた。そのことを現代の合理的な科学観に立ち批判するのはたやすい。しかし、日本音楽に対する正しい理解を学生・生徒に得させたいという田辺の問題意識は今日でも首肯できるものである。

『都山流楽報』第三八七号（昭和十六年八月）に寄稿した「天山莊楽談（百廿九）」の「<sup>(24)</sup>雅楽即ち雅正之楽とユダヤの奴隷音楽」において田辺は「私は此頃、文化講義の際に、その途中に雅楽の再検討について力を極めて述べて居る。それは雅楽といふのは元来「雅正之楽」といふ意味で、茲に「雅にして正しい」音楽といふことの重要性である。正しいといふことは邪道に陥つた音楽に相対比するものであつて、何が正しい楽で、何が邪道の楽か之れを考慮する必要がある」<sup>(30)</sup>（傍点は原文）と日本文化講義で雅楽の重要性を強調したことに触れている。

田辺はこの随想の中で「欧米には斯かる奴隷的なユダヤ的な音楽が益々跋扈して居る。之れが即ち世界の人類を動物に墮落せしめんとする恐ろしい現象である。之れを救つて人間を神に近づけんとするものは雅正之楽、即ち雅楽である。今日位世界が雅楽の出現を要求して居る時はないといつてよい」<sup>(31)</sup>と雅楽への大きな期待を示していた。

実施事例資料八の室蘭高工での日本文化講義の講義録を見ても、確かに田辺は雅楽について極めて重要だと力を入れて語っている。「世界の音楽を救ふものは雅楽でなければならぬと思ふ」とまで述べており、講義録三十六頁中六頁余りが雅楽の話に割かれていた。田辺は大正十(一九二一)年二月に刊行した『雅楽通解』の中で「古代に於ける東洋西洋両文明世界の音楽が打つて一丸となつて茲に現はれたものである。言ひ換へれば古代の全世界の文明圏の音楽が悉く一丸となつて我が邦の雅楽となつたのである」(傍点は原文)と既に雅楽の歴史上の価値を称揚していたが、田辺にとって雅楽は日本文化講義においても世界の音楽を救うものとして重要な地位を与えられていた。

#### (五) 田辺の日本文化講義に対する学生・生徒の反応

『帝国大学新聞』第八一五号(昭和十五年六月十日)は八面において前号からの連載記事「現代高校生を語る②」に紙面を割き、「生徒の欲求するもの／量よりも熱を／多すぎる講演会」という見出しを付けて座談会の中で出席者に講演会に関し語らせている。日本文化講義については「講師の選択といふことは必要ですね、生徒の要求してゐる人は来ないで、前世紀の人が来る、何にもならない、もう少し自分等の聴きたいと思ふやうなことを話せる人が来るといふ、といふやうなことを言ひますね」、「同じ講演でも文部省から来ると熱が出ない、自分らの弁論部がやると聴くこれは無理はない、やはり学生の心理を掴まなければ」という意見がある中で帝国大学新聞社側の「Cさんの方などで非常に歓迎されたといふのは」という質問にC(東北某校教授)は「田辺尚雄さんの日本音楽ですね、あれはまだ放料(課)後続けてやつてくれといふ要求があつた位です、まあそれだけです(笑声)」と答えている。

実際に田辺の日本文化講義が好評であつたことを伝えるのは前述した実施事例資料二の『帝国大学新聞』第七三四号(昭和十三年十月三日)の記事である。先の引用部分に続き記事は田辺の日本文化講義の様子を次のように伝えて

いる。

一部生徒の中には、続講を希望する者多く、遂に同日午後四時半より教官食堂に於て続講が行はれる事となつた。蓋し文化講義好評・続講といふ現象は、全国高校中でも稀有のトピックであらう、さて教官食堂も熱心な教授や生徒によつて忽ち満員となり感激した、田辺氏は、続いて徳川時代に於ける三味線楽の興隆に就て語り、最後に現代及将来の日本音楽として、所謂新日本音楽を挙げ、宮城道雄氏の個人的発展をレコードに依つて例証するなど、多大の感銘を与へ、午後六時すぎ閉会した。(傍点は原文)

田辺の日本文化講義がいかにか好評であつたかはこの記事から明らかであろう。好評であつた理由の一つは田辺が講義の中で学生・生徒に対しレコードを實際に聴かせたことにある。田辺の日本文化講義を伝える学生新聞等の記事は必ずレコードが用いられたことに言及しており、レコードを用いた講義が当時では珍しかったことを示している。

もう一つの理由は洒落や機知に富む田辺の話術である。昭和十六年六月三十日の室蘭高工での日本文化講義では三十六頁の講義録の中に「(笑)」と書かれた箇所が二十六箇所あり、二時間の講義の中で少なくとも二十六回の笑いを誘つていたことが確認できる。また、昭和十九年一月二十四日の石川師範での日本文化講義では速記録の中に「(笑声)」、「(爆笑)」という表記が十一箇所出てくる。四時間にわたる講義の速記を専門家ではなく在校生が担当しており、書き落しもありうることを考えれば、笑いを誘う箇所はこれよりも多かつた可能性がある。「爆笑暫し鳴を止めず」と書かれている箇所もあり、いずれにせよ速記録からは田辺の講義が学生・生徒にとつて親しみやすいものであつたことがうかがえる。

『名古屋大学五十年史 部局史二』(平成元年)は「第六章 経済学部」の「第一節 名古屋高等商業学校」で「四「国体明徴」と日本文化講義」という項目を立て、名古屋高商で実施された日本文化講義について説明している。そ

ここには昭和十一年の担当講師（紀平正美、田崎仁義、西田直二郎）に対し学校側が記録した所感を基に下した、「御用学者の話はつまらなく、そうでない人の話は聞くわけにはいかない」という矛盾がこの国策講義シリーズにはつきまといっていた<sup>(84)</sup>という日本文化講義への評価が書かれている。

文部省とのつながりや日本文化講義の担当回数を踏まえれば田辺は「御用学者」の範疇に入るとも言えようが、田辺の講義は前述の学生の反応を見る限り決して「つまらない」という言葉で片づけられるものではない。本稿で取り上げた田辺の日本文化講義の実施事例資料九点から判断する限り、名古屋高商で田辺が行った日本文化講義も生徒に好評であった可能性はむしろ高いであろう。五百名以上の人物が担当した日本文化講義に対し昭和十一年に同校で担当したわずか三名の講師の講義に関する所感をもって「矛盾がこの国策講義シリーズにはつきまといっていた」という断定をする姿勢は決して科学的であるとは言えず、一面的であり安易である。

#### 四 田辺尚雄にとつての日本文化講義

はじめに述べた通り五百名を超える学者、文化人、実際家らが日本文化講義を担当しているが、著作の中で日本文化講義に言及している者は現時点で田辺しか確認できていない。田辺は日本文化講義に対するある種の信念があったと見られ、以下に述べる通り、日本文化講義を補う著書を刊行し、戦後の著作の中でも日本文化講義について回想していた。

(一)『日本音楽概説』の刊行―日本文化講義の欠を補う書

田辺は昭和十五(一九四〇)年六月に『日本音楽概説』を刊行した。同書の序で田辺は当時の日本の青年学生が西洋音楽については詳細に知りながら日本音楽のことはほとんど知らない弊を嘆いた上で、次のように述べている。

此の重大なる弊害は、旧来の畸形児的教育の結果であつたことに心づき、最近に政府は日本精神作興の一助として、全国の高等専門学校に日本文化講義の講座を設けられ、私はその中の日本音楽の講義を受け持つこと、なつて、毎年連月、全国の巡講を命ぜられ、殆んど席の暖まる暇もない程である。然し此の講義は時間が極めて短かく、加ふるに多数の蓄音機レコードを使用する為めに、極めて概要を述べるに過ぎないことを遺憾として居た。そこで此の欠を補ふ一助として茲に本書を編むこと、なつた。本書が此の重要な国家的事業の一助となることが出来れば光栄である。<sup>(85)</sup>

田辺は政府にとつて日本精神作興の一助という意味を持つ日本文化講義を「重要な国家的事業」と考えており、日本音楽の講義を担当して全国を巡講するという自らの役割に矜持を持っていたことがうかがえる。しかも、日本文化講義の講義内容を補う一書として『日本音楽概説』まで刊行した。このことから田辺の日本文化講義への強い一念が伝わる。

刊行時期の関係から日本文化講義で言及した諸点のうち同書に書かれていないものもある。音楽が精神の浄化に役立つこと(昭和十五年十月三日の名古屋高商における講義で言及)、外国の音楽は個人主義的であること(名古屋高商)、雅楽とは雅正の音楽であること(昭和十六年六月三十日の室蘭高工および昭和十九年一月二十四日の石川師範)、国家観念を養成するには音楽が一番(室蘭高工)であること、西洋の音楽は恋愛主義・享楽主義だが日本の音楽は義理が重要であること(石川師範)などである。



しかしながら、上記の点以外では、同書は田辺が行った日本文化講義の講義録や速記録と内容的に重なるところが多く、講義では簡単な言及に留めたところについてもより詳しく論じている。特に日本音楽の変遷については同書の七割近い紙幅を割いており、概観とは言いながら詳細な説明がなされていた。田辺が日本文化講義で伝えたかった内容を把握する一助に『日本音楽概説』がなるのは確かである。

## (二) 日本文化講義に関する回想

田辺が日本文化講義を重視していたことは戦後に書いた回想の中で日本文化講義に言及していることから確認できる。昭和五十五（一九八〇）年三月に発表された「田辺尚雄 思い出ばなし その22 世界教育会議」〔『季刊邦楽』第二二号〕で田辺は次のように日本文化講義に関する思い出を語っている。

昭和九年ごろから、文部省の命で、全国の高等学校や専門学校や大学の学生に対して、「日本文化講義」と名づける講演が行われた。もちろん軍の後援があるのである。これは、この時局に当たり、学生に日本精神を強く植えつけようというのが目的である。歴史や文学などいろいろの部門に分かれ、それぞれの専門家が講師として出張講演するのであるが、私は音楽の部門の担当とされた。講演用の沢山のレコード資料を携えて、北は北海道から南は鹿児島まで、全国ほとんどの都市を講演して歩いた。……

前に述べたように、この講義は文部省の命でもあるし、軍部の後押しがあるので、これを受ける各学校は異常の緊張で、講師に対しては非常な優待をした。いちいち校長や教頭が出迎え、講義が終わると、教頭や教師が付き添って附近の名所を案内し、夕刻からは一流の料亭、また附近に温泉があればその温泉場の第一流の旅館に席を設け、校長、教頭を初め、市の助役まで出席して、盛大な歓迎会を開いてくれる。……

最後の講演は昭和十八年の夏、兵庫県尼崎での講演で、講演の最中に敵機襲来し、工場地帯に盛んに爆弾を落とすので、講演などしておられず、早々に逃げ出した。<sup>86</sup>

日記やメモ等に頼った可能性があるにせよ、九十六歳時点での回想であり、記憶違いや不正確な記述があるのはやむを得ない。昭和十八年の夏の尼崎における講演が最後に担当した日本文化講義というのは昭和十九年一月二十四日に石川師範で日本文化講義を担当していることから考えれば田辺の記憶違いだと見られる。日本文化講義に軍の後援があったことを示す資料を筆者は現時点で確認できていない。もちろん実施する各校が文部当局よりも配属将校や軍部のことを意識していたという面はあろう。

また、『続田辺尚雄自叙伝』（昭和五十七年十二月）では「第二十四話 戦時体制」の「文部省関係」という節で「日本文化講義」と小見出しを付け、次のように語っている。

文部省ではこの他になお専門の講師を全国の高等学校や専門学校に派遣して、学生を集めて「日本文化」に関する講義を行った。勿論それは戦時体制中に於て、日本精神鼓吹の目的である。私は長い間文部省との関係も深く、殊に国民精神文化研究所の연구원として芸能関係の年長者（田中博士は老年なので除外）ということで代表に選ばれて、日本音楽に関しての講義を引受けさせられた。お蔭で日本全国（北は北海道から南は九州の鹿児島まで）に亘り主要都市を悉く訪れることができて（前に記した中尾都山氏との演奏旅行でかなり全国的に旅行していたが、それと合せると、日本中殆ど行かぬ所はないくらいである）非常に勉強になった。それに各地の学校でも、非常な歓迎で、講義終了後は温泉地（会津では東山温泉、山口市では湯田中温泉など）の第一流旅館で最高の接待をしてくれた。行った先は余り多いので一々は忘れてしまったが、記憶に残る二、三のことを話せば、鹿児島の高等学校では、この土地特有の珍しい楽器「天吹」を入手したいと思ったが、今は殆どやる人もなくて

楽器など手に入らぬとので失望していたら、帰途につくとき急にこの高等学校の事務員で天吹を持っている人があるというので、懇願してその一管を手入することができて、非常に嬉しかった。<sup>(87)</sup>

実際に田辺は鹿児島第七高等学校で昭和十三年五月十一日に日本文化講義を行っており、縦笛の一種である「天吹」を手したのはその時であろう。「講義を引受けさせられた」という受け身の表現をしているものの田辺の中で日本文化講義は愉快な記憶とも結びついているのはこの思想善導講義の趣旨に賛同し、積極的にこの教学刷新事業に関与したからこそだと考えられる。

『都山流楽報』第三六〇号（昭和十四年五月）に書いた「天山莊楽談（百十六）」の「<sup>(22)</sup>音楽と国家観念 日本人と日本音楽」で田辺は「今日学生の多くも、教育者の多くも、皆邦楽を野卑だと信じて居る」と嘆き、「我々は日本に生れたことが幸福である。我々日本人は此の幸福を甘受するの権利がある。して見れば一面に於て此の日本国を永遠に榮あらしめる義務を持つて居る。それには日本文化を正しく向上せしめることが我々の責任である」と日本文化講義の趣旨と合致することを述べている。田辺は日本精神の高遠な魂が音楽の中に入っているはずだと説き、この立派な魂を永遠に生かし、今日の形において世界を導くべき文化にしていくことが、我々日本人の責任でなくてはならないとする。そして「私は私の関係して居る各大学及び専門学校に於て、学生に日本音楽を講義する始めに当つて常に此の事を切言することにして居る」と述べている。田辺は東京帝大や國學院大学、東京音楽学校で日本音楽の講義を担当していたが、田辺にとって日本文化講義は関係していた諸学校にとどまらず全国各地を巡講し、学生・生徒に日本音楽の真髄を伝えるという自らの使命を果たす絶好の場であった。

## おわりに

本稿では日本音楽・東洋音楽研究の草分けであり、日本文化講義にも強い信念を持って臨んだ田辺尚雄に焦点を当て、田辺が昭和五（一九三〇）、六年から展開した日本精神論的音楽論を踏まえながら彼が戦時期に担当した日本文化講義についてその内容を考察した。

幾つかの課題が本稿には残る。田辺が日本文化講義を担当したのは昭和十二年度からであるが、日本文化講義が開された昭和十一年度に田辺が一度も担当しなかった理由が現時点で不明である。三（一）で述べた通り昭和四年に帝国学士院賞を受賞し、十一年夏に文部省直轄学校に送付された講師一覧「日本文化講義講師表」にも名前が入っていた田辺に対し昭和十一年度のみどの高等教育機関からも講師依頼がなかったとは考えにくく、田辺の自叙伝で長期の海外調査に出ていなかったかなどを調べたがどのような事情により田辺の担当がなかったのか確認できていない。

このこととも関連するが、日本文化講義の前身である「特別講義」についても文部当局の資料を見る限り田辺は一度も担当していない。特別講義とは生徒に対し広く一般思想問題、社会問題等に関し中正穩健なる識見と批判力とを養わせ、また誤って外来思想にのみ傾注することを避け、よく日本精神の本義に目覚めさせるようにするという目的で昭和五年度に官立高等学校で実施され、翌六年度から官立専門学校、官立実業専門学校、高等師範学校、大学予科にまで実施対象が広げられた思想善導講義である。その趣旨から考えても田辺が特別講義の講師を務めるのは不思議ではなく、特別講義の後身である日本文化講義を含め、田辺が昭和五（十一年度）の七年間に高等教育機関で一度も思想善導講義を担当しなかったのはむしろ不自然である。そこには何らかの理由があると考えられるが、その理由を現

時点で解明できていない。

また、四(二)で見た通り田辺は戦後になってから日本文化講義について回想しているが、日本文化講義が実施されていた時期にこの講義について田辺がどのように考え、どのような準備をしていたのか、また、講義を行った学校での反響はどのようなであったか等を知るためには田辺の日記や手帳、備忘録などの身辺資料に当たることがある。戦時期における田辺の日記については昭和十三年の日記が民音楽博物館に残されていることは確認したが、今回はこの日記を閲覧・調査することはできなかった。<sup>91)</sup>

終戦の約半年前に当たる昭和二十年二月に刊行された『日本国家科学大系』第一巻「文化・教育及厚生政策論」に田辺は論文「音楽文化政策論」を執筆している。終戦前の田辺は音楽文化研究所の設立といった音楽文化政策や大東亜音楽の建設に関心を持っていたが、このことが田辺が行った日本文化講義にどのように反映されていたか(あるいは全く反映されなかったか)については、昭和十七年度以降の詳細な実施事例資料が三(三)⑥で取り上げた実施事例資料九(昭和十九年一月二十四日の石川師範での講義)の一点のみしか現時点では集められていないという事情もあり、本稿では考察できなかった。

これらの課題に取り組むためには、今後も田辺に関する諸資料とともに戦時期の教学刷新事業に関係する諸資料を丹念に収集し、調査、考察に努める必要があることは言うまでもない。

(附記・謝辞) 本研究はJSPS科研費[P26380262およびP18K00113]の助成を受けたものです。他機関所蔵資料に関する照会や取り寄せ、複写依頼等に関し大阪工業大学図書館相互利用系の筒井純氏に一方ならぬお世話になりました。また、公益財団法人都山流尺八楽会の資料室に所蔵されている『都山流楽報』の閲覧・撮影に当たっては同

会代表理事・理事長の森田柗山氏並びに理事・事務局長の藤田天山氏よりご高配を賜りました。この場を借り、改めて御礼申しあげます。

## 附録 田辺尚雄の日本文化講義の速記録

※田辺が昭和十九年一月二十四日に石川師範学校で行った日本文化講義（前述の実施事例資料九参照）の速記録は金沢大学資料館所蔵の簿冊「昭和十八年～昭和十九年 第七類第二項 研究及補助関係 第四類第二項 講習・出張・諸願届等 石川師範学校〔昭和十八年九月十四日～昭和十九年十月二十八日〕」（資料番号：200204070278）に収められている。速記は本科二年生一名と本科一年生一名によるものであり、以下にその全文を掲載する。<sup>22</sup>

### 第二回文化講座 田辺尚雄氏

「日本を中心とした大東亜音楽に就て」

只今校長先生から紹介がありました通り私は田辺であります。今日日本を中心とした大東亜音楽に就いて少し話して見たいと思ひます。

みなさんにとつては極めて珍しいお話であるかも知れません。

或ひは不思議なお話と御感じかも知れません。中には変なものを持ちこんだと御思ひかも知れません。

今も校長先生の御話のあつたやうに、どうしても勝ちぬくためには大東亜が一つにならねばなりません。これはすでに今まで何回となく総理大臣から申されてゐる通りであります。日本が指導して大東亜が一つになつてゐればこれは絶対不敗のものであります。

大東亜が一つになるといふことはいろいろありませうがお互に理解し合ふことが最も大切です。理解するといふことはいろいろ問題もありますが、お互に精神的に理解しなければなりません。つまりお互の文化を理解しなければなりません。

今まで不思議な筋道をたどつた思想の問題はみんなよく知っておられる。ペーターペンやいろいろの人のことについて詳しく知つてゐて日本のものをすこしもしらなかつた。そして大東亜のこととなると南洋の土人とか野蛮人とか言つて見向きもし

なかつたのであります。

つまりさういふ風な教育が今日の戦争を起したのかもしれない。だから、今日は、こゝでこんなお話を申し上げねばならなくなつたのです。私の話を、「げてももの」を持ちこんだとお思ひでしたら今日の戦争は駄目なのであります。

「げてももの」といふと、何かかう目新しい不思議なものを集めて来て、はじめはひつくりかへしなどして興がつてゐるが、しまひにはいやになつてしまふ。これなどは本当の「げてももの」ではないのであります。茶碗一つが一万円もする——私など見ますれば猫の碗のやうにしか見えぬのであります（笑声）——さういふものをながめてよるこんでゐる。何か珍らしい不思議なものとすぐ「げてももの」として興がる。

それで大東亜にあるものなどは、珍しい不思議な野蛮人のものとして珍しがる。西洋人のものの方はすべてかうであり気に喰はないのであります。

私はよほど前から大東亜の中に入りこんでゐましたが、支那なんか三十年もほど前から始終往来してをりまして、北は樺太から、南はずつと赤道を越えてギルバーに近いくところまでも行つてをります。

西洋人のものの方は非常にちがつてゐる。自分達のもつてゐないものは皆野蛮であるとするのであります。それで南洋に

住んでゐる原住民にキリスト教に入れと言ふ。南洋の原住民なんかと申しまして、回教が有ります。回教は、宗教としてはキリスト教よりもはるかに高いものであります。

日本のキリスト教はもつとも非常に進んでゐるのであります。先日も私は日本のキリスト教の尾崎カウダウ（小崎弘道）といふ人と一緒に旅行して色々話し合つたものであります。非常に高いものであります。西洋人のキリスト教とは非常にちがふのであります。そして原住民にキリスト教を押し付けるのであります。実にいやです。武器を与へて、互に戦はしめてよるこんでゐるのであります。

このやうな態度では彼らを指導することが出来ないであります。インドネシヤの回教、ビルマの仏教、インドの印度教などを一様に見て、更にそれよりもつと大きく高い神道と申しますか、皇道があるといふことを知らさねばなりません。

土人のやつてゐる音楽だからいけない、といふのはいけない。自分達のやつてゐる音楽は最もよいといふのではないのであります。

科学にしても、東洋にはずつと前からもつとすゝんだものがあります。十九世紀に発達したサイエンスに、西洋人は何でもむすびつけるのであります。例へば音楽に於ても音楽理論、作曲法、ハーモニーなどの如きいろいろのものを結びつけて

『音楽科学』と名付けてゐるのであります。

例へば道の最中を歩けば、ぶつかるのは当然でありまして、右か左によけなければなりません。その時日本では左にさけるのでありまして、これは日本では左に刀をさしてゐるので右へよければ刀がふれ合ひますし、又いざといふ時には抜きにくいのでありまして自然左へよけるのであります。西洋人は右に避ける。これは、ローマ字は左から書いてゐるから右にさけねば逆に読まねばならぬ。これは、大変なことになるのであります。(笑声)

音楽の理論を学ぼうとする時には西洋のものを基礎としてなすやうであつたがこれではいけないのでありまして大東亜音楽を作らねばならぬのであります。

大東亜音楽に対する音楽を作るならこれを理解せねばならぬ。殊にレコードを使用する関係上非常に時間がかゝるのでなるべくこれを少くしようと考へてゐるのであります。

大東亜音楽の中でも日本音楽に対する誤解が三つ位あるのであります。

その一つとして、西洋音楽は組織が複雑であるが日本音楽は単純なものだから幼稚だといふもの。複雑なものは何でもかんでも単純なものよりも高いといふのが西洋のまちがつた考へ方でありまして。

第二の誤解はですね。日本音楽では野外で大合奏するものが無く、小さい四畳半でやつてゐるといふすこぶるケチなものといふ考へ。

第三はですね……これは皆様には、一寸……必要のないことも知れませんが……花柳界のものぢやないかといふのです。徳川時代の音楽は花柳界のものであつたといふのですが、皆様も御承知のやうにあの時代は大名が諸国に封ぜられておりまして、その留守居役といふのが江戸の町に住んでゐたのですが、それらが互ひに外交折衝しなければならぬので、その折衝の場處として、必要にせまられて作つたのが吉原なんかと言ふ遊郭であつたのですね。ですから決していやしいものではない。

音楽もその一流のところから出てゐるのであります。それで花柳界と申しましても、肉欲を満足させる場處ではない、外交折衝の場處だつたのであります。花柳界といふと、すぐけがらほしいところだといふ人は、そのけがらほしい花柳界に入り込んでゐる人にきまつてゐる(爆笑)——私は實際今の花柳界といふものは全く知りません。

ことに私は第一に、大きな誤解が有ると思ひます。何でも科学的にやつて行かうといふ考へから、すぐ分類して行かうとする。例へば楽器にしましても物理学的に振動するものを基礎として糸をはつたもの、弦楽器、又管の中の空気の振動によるも



のとしまして管楽器、——管の側面に穴をあけて音を出さうとしたのでありまして、これには木で作った木管楽器、金で作った金管楽器の二種が有ります。それから太鼓などの打楽器。

このやうにすべて組織的にしてしまふのであります。そこで日本の三味線はどれに入るかと言ふと糸がはつてあるから弦の楽器に入れます。

弦楽器にも、弾弦楽器——三味線のやうに弾いて音を出すもの。始めは弾弦楽器といつてゐたのであります。今は撥弦楽器と言ひます。撥弦楽器——ヴァイオリンのやうに弦をこすつて音を出すもの。打弦楽器——ピアノなどの様に弦をたゝいて音を出すもの。となります。

それで、日本の三味は撥弦楽器であつて、ギターみたいなものである。分類すればチャンとさうなるので、比較してギターの音は澄んでゐてきれいだが、三味線は濁つてゐてきたない。その上ギターだとハーモニーするから二重奏、三重奏と出来るが三味線は合奏出来ない。するとギターが一段進んでゐるといふのであります。

ところが三味線は「撥」<sup>はち</sup>ではじくのですが、「撥」といふのは太鼓を打つものであります。太鼓の音は実に不正確なのでありまして、実にいゝかげんなものであります。それで打楽器は補助機関であります。ところが日本では太鼓の上に糸をはつた。

そして音の高さといふものを正確に表はさうとしたのであります。だから、根本的な見方では打楽器であります。

弦楽器は、元來、感情を表はすものでありまして、打楽器は意志の力を表はします。三味線は魂の力でありまして決して情を表はしません。三味線は芝居の伴奏楽器であります。カルモチンを飲んで死ぬときギターが静かに鳴ると失恋なんかでの自殺などにはびつたりくるのであります。(笑声)。ところがハラを切るときに、三味線だから切れるのでありましてギターではハラは切れないのであります。(爆笑)

日本のハラを切るのには感情ではないのであります。勘平がハラを切つたのはお軽に逃げられた(笑声)からではないのであります。全く忠義の一念で切つたのであつて情の、恋の、といふものではありません。

又、文楽といふものがありまして、木で作つた人形が実は魂を持つて動くのですが、あれなんか楽器のどの楽器を用ひても駄目で三味線でなければ人形に魂が入りません。

日本人的なものの方を見方をしなければならぬのであります。三つの誤解の、先づ第一に西洋のものは非常に複雑であつて、複雑なものは単純なものよりも高いといふ見方、これはまちがひであります。

ものには目的といふものがあります。ことに、大砲——大砲

にもいろいろ種類が有りまして飛行機をうつ高射砲、軍艦の主砲、また眼の前の敵をうつ追撃砲、機関砲等目的によつていろいろあるのでありますが、全く同じ目的に使ふ二つの大砲があるとすれば、複雑なものゝ単純なものゝどちらがよいかを考へるならば単純なものが良いのは言ふ迄もないことであります。複雑なものは取扱ひは簡単なものよりもむづかしいのであります。

音楽には三つの性質が有つて、一つは動物性、二つには人間性、三つには神性——の三つが有ります。動物性といふのは、音楽を聞いておもしろい愉快である。したがつて生活をなぐさめてくれる。中には音楽によつて士気を鼓舞してくれるといふのであります。これは人間だけではなく殆んど大部分の動物に共通なことであります。

私の友人に尺八をすきなのがありますが、その友人が或る時上野の動物園へ尺八をもつて行つて動物の檻の前で尺八をふいたところが、象なんかはあの長い鼻を上げたり下したりしてよろこび、大低〔抵〕の動物は皆喜んだのですが、一匹、豹であつたさうです。

一べん、「上野の動物園の豹が逃げたから注意する様に。もし出会つても逃げてはいけない。逃げると必ず飛びつくから。」といふことをラジオで放送して大騒ぎをしたことが有りますが、

あの豹は、逃げて音楽学校へとび込んだ。ところが誰か一人、練習をしてゐたらしい。すると豹は音楽がきらひなので、下水穴へ頭をつ、こんで、そこで捕つたのであります。

音楽のきらひなのは豹だけのやうであります。それで音楽のきらひなものが最も猛悪だと（爆笑 言ふことになります）。爆笑暫し鳴を止めず）蛇なども音楽が大好きな動物でありまして、印度などへ行くと、コブラ——あの毒蛇のコブラを使ふものが居ます。あれは、プーンギー（poungi）——これは私は近頃瓢箪と訳してゐるのでありますが、これをふいてコブラを踊らすのであります。今そのレコードをお聞かせしようと思ひます。

（音盤鑑賞）

すべての動物に共通したものであります。

人間といふものに、音楽といふこんな立派な芸術がさづかつてゐるといふことには意味があると思ひます。

第二の人間性。人間のもつてゐる思想を表現するといふことで、一番大きなものは、作曲者をもとめる問題であります。音楽は人間のもつてゐる思想をあらはすものだ、俺の思想を表したものだといふのが作曲者といふものでありまして、西洋の「作曲者第一主義」なんかこゝから出てゐるのであります。そして一番立派な思想を表現したものは「楽聖」と称するのであります。

神性といふことでありますが、毒蛇に音楽を一万回きかしても蛇の徳が高くなつた（笑声）かといふとさうではない。これが動物性であります。

そこで動物から抜き出して神に近づけてやらうといふ神のおぼしめしによつてさづけられたもの——これは日本の考へ方であります。

江戸時代に光崎検校といふ琴の名人が居りましたが、その当時の音曲は非常に複雑な技巧に走つてゐたので、——技巧といふことで争つてゐたら結局行づまるのでありますが——このすたれた音楽界を正さうとして巖島神社へ二十一日間お籠もりをした。そして二十一日目に居睡りしてゐると、神様がお現れになつて非常に神々しい曲をひかれてゐた。はつと思つて眼が覚めて、作つたのが『秋風の曲』であります。私は、これが徳川時代の代表的な音楽だと思つてゐます。

それで日本では演奏をするときには命をすて、も演奏する。真剣に精魂をこめて演奏するのであります。それで楽聖といふのは、非常な立派な演奏したものをいふのであります。複雑なほど己があらはれて良いといふ西洋の見方に対して日本ののは最も純正なほど神に近いものであるといふのであります。

第二に四畳半だから貧弱だといふのでありますが、西洋でもピアノの名人は、大会場でやるのはやはりいやがるもので、や

はり小さい四畳半の狭い所でやる方が感じをよくするものです。つまり最高の芸術は四畳半に在る。

ピラミッドを見ましても、一番広いところは一番低く、一番高い所はやはり石一つの狭い所であります。私の四〇年以上、——高等学校時代からつき合つてゐる帝大の医科にゐる友人の博士がゐますが、X線で高速写真を用ひて口をうつして研究したが西洋ではアーでは口の型が変らず、イーも変らないのであるが日本音楽ではアーからイーに至る間に非常に微妙な変化をするのであります。

西洋は口の中の体操で、日本のは踊りであり〔ま〕して、体操ならば一万人で何万人でもできるが、踊りとなると、——歌舞伎の役者に尾上菊五郎といふのがゐますが、これは非常な踊の名人でありますが、この菊五郎と同じ踊りの名人を百人集めて一緒に踊らしても決してそろはないと思ひます。

日本の音楽といふものは芸術の最高点をねらつてゐるものであります。

しかし、石を一つ一つ積みあげて行けば途中でくづれてしまひますから、やはり始めは広いところから始めてだんだん最高点へ進まねばならぬのであります。基礎の方は、やはり、西洋のものを用ひてやらねばなりません。

第三の誤解。これは、一寸、皆さんには必要でないかもしれ

ませんが……将来にとつて大へん重要なことと思ひますから少し申し上げます。

二年ばかり前京都府府庁での講演の後で座談会に於て、「日本の音楽は花柳界のもので恋愛ものが多いので学校で教へられないではないか。」と中学校の先生が質問をしたので、私は、「それぢや、あなたは日本の音楽と西洋の音楽とどちらが恋愛の音楽が多いかと言ふことを調べて見られましたか。」と言つてやりましたが、日本には恋愛の音楽は非常に少い。西洋のオペラは恋愛の享樂主義であるが、日本にはそんなものは少しもない。日本に於ては必ず義理といふものが入つてゐる。尤も西洋でも、ベートーベンの「フィデレオ」といふオペラだけが恋愛享樂主義でない。これ一つだけであります。

西洋のものは享樂的なものであつて指導性が無いと申しますと、かう言ふ人が有ります。——「芸術は道徳に支配されてゐない。」かう言ひますが、芸術のための芸術といふものは存在しない。「最高の芸術は道徳と一致する」とちやんと言つてゐますからね。芸術は芸術、道徳は道徳と、芸術と道徳といふものがわかれてゐるとはおかしな考へ方ですね。

昔の教育制度といふものが誤つてゐたのであります。芸術を高める為には教育制度が下つてはいけないのであります。

昔の小学校——私は四才六ヶ月で入つた（笑声）のでありま

すが、一年の時からすぐ漢字の交つた文章を習ひ、中学では英語の原書などもやつたのであります。

日本は上代は文化が低かつたが、その頃印度は非常に文化が高く推古時代にとり入れて非常に高くなつたのであると習つたのであります。大和民族が後から入つて来て先住民族を征伐したといふ考へはまちがひで、大和民族がはじめから居たのでありまして、アイヌなどは却つて後から入つて来たものであります。神武天皇の頃には非常に文化が高かつたのであります。日本の芸術的品位はギリシヤなどのそれよりも比較にならぬ程高かつたのであります。

日本の音楽は、どうしてもつて来たかと申しますと——地球上に人間が発生したのに三つの説が有ります。

第一は、神様がアダムといふたつた一人の人間をつくられ、それではさみしからうとその男の寝るる間にあばら骨を一本ひきぬいて作つたのが女で、これが人間の始めだと云ふのであります。これは問題にされません。

第二は、松茸が生えた様にあつちこつちから人間が出来たといふのであります。

第三は、進化でありまして、或一地方に大集団が出来て来たもので北京の附近に百万年前の骨が発掘されたのでありまして、これが世界で一番古いものとされてゐますが、大東亜民族は三

○万年程前から非常な高い文化をもつてゐまして音楽もそのころに発生したと思はれます。

そこでその、音楽とは、神様から授けられたものでこれによつて神様に近づかうとしたのであります。大東亜によい芸術が有つたが、それによつてよい素質をもつてゐるもの神に近づかうとした。

この様な優秀な民族が大東亜に居たに違ひないのである。太陽が東から出ると云ふのでそれを求めて東へ、東へとやつて来たものが大いに和して大和民族であるのであつて先住民族を征服したのではない。

それで日本人は大東亜を指導する力をもつてゐる。何故かといふと大東亜のあらゆるものはみな自分達の兄弟と思つてゐる。それで大東亜の音楽をゲテモノと考へるのはいけないのでありまして西洋人はゲテモノと考へてゐるのであります。

原始的なものは必ず幼稚であるといふはづはない。神武天皇の御東征の時、天皇の御詠みになつた御製の一つが久米歌として、後世ながく佐伯・大伴氏の間に宴席なぞのときうたはれて来たのがつゞいてゐますが、これなんか非常に立派な音楽で有ります。天武天皇の御時に文の舞、式の舞といふものが制定され、文の舞としては五節の舞、式の舞としてはこの久米舞が採用されたのでありますが、この時二十人で舞つたといふ記

録が有ります。

文政元年、仁孝天皇の即位の式の時に復活されて四人で舞ひ、箏樂を使ふ様になりました。それから、代々即位式の時に用ひられる様になりました。明治に入つてから二月十一日にも行はれる様になりました。

この曲は三部に分れてゐるのであります、

参入 マイリ

揚拍子 アゲベウシ

退出 マカンデ

の三つの中、揚拍子が昔以来のものであります、参入、退出の両曲は後世につけ加へられたものであります。

この揚拍子は非常に勇壮なもので、私は中学生なんかにもどしく歌はしたらと思つてをります。今その曲をお聞入れ致します。

〔音盤鑑賞〕

〔午前之部終り〕

〔午後の部〕

日本の上代に於ては進んだ文化を持つてゐたのであります。決して未開のものでありません。

苗を植えてそのまゝ、放つて置くとやがてはかれてしまふ。だから肥料をやらねばならぬことは当然であります。だが、どん

な肥料にも栄養分と毒素とが有るものであります。

外国文化といふものの中にはいろんな毒素をもつてゐるのであります。その中からこの毒素をすてねばならないのであります。

西洋音楽では享樂的な個人主義的な毒素を持つてゐるのであります。

中央アジアでは昔は文化が非常に進み、キジなどは特に進んでゐたのであるが、何時の間にかなくなつてしまつたのもこれはインドやイランなどの文化をとり入れた時に毒素も採り入れたためであります。

日本は昔から外国文化をとり入れたが、未だ曾つて衰へたことがない。これは 神武天皇以来立派な芸術が西洋音楽を避けたからである。一時はジャズも発達した〔が、〕すぐなくなつてしまつた。日本は立派なものとしてすて、ならない上代の民謡が有つた。東遊びといふものが有ります。これはもと東國のものであります。加茂神社の神事に用ひられ東歌とか東舞とかとも言つていろいろと内容もかはつてきてゐますが、「一うた」「二うた」は大體奈良朝の初期のものとみえます。今それをかけてごらんに入れます。

〔音盤鑑賞〕

音楽を個人的享樂主義的なあつかひをされては困るので、皆

様にオシルコと御飯とを並べて、どちらがよいかと言へば、やはり、オシルコの方がよいにきまつてゐるのは、オシルコには享樂的なものが有るからであります。しかし毎日毎日オシルコを食べてゐればしまひにはいやになつて来ます。しかし御飯は立派に自分が働ける為に食べてゐるのであつて、享樂的に食べてゐるのではない。

音楽に於ても享樂的にやつてゐるのではなくして、神に近づかうとしてやつてゐるのであります。アリストートル〔アリストテレス〕も「音楽とは自分をたかめて行くものであつて他人を喜ばすためには立派なギリシヤ人はやらないのであつてそのためには奴隸の音楽が有る〔と〕と言つてゐるのであります。

人の前に演奏する人は聞いてゐるものが喜んで喝サイシアンコールを求めるとよるこんで又出て来て演奏をするといふ様なものは最も奴隸の音楽であります。併しこの奴隸的なものの方へ方は一掃しなければなりません。

印度では人が聞かうが聞くまいがそんなことは問題でなくあかりを消して誰もゐないところで神様の前で一生懸命、命がけでやるのであります。

最もくだらない楽器といへば御飯を食べる茶碗を箸でた、くほどつまらない音楽はないと思ふのであります。ところがその茶碗をずらりとならべてをいて水を入れ、その入れ加減によ

つて音階をつくりそれを箸でたゝいて音楽を出すものが印度に有るのでありますが、手がだるくなるので、その傍で「びわ」を弾いて勢をつけるのでありまして、交互にならすのであります。これを今お聞かせ致したいと思ふのでありますが、これは、神の前でたゞ一生懸命に全く命がけてやつてゐるのであります。私は、たゞ、西洋のオーケストラと、この茶碗と箸だけで奏する音楽とそれほどまでに、聞いてゐてちがふかどうかといふことを聞いてほしいのであります。

〔音盤鑑賞〕

次に雅楽のお話を少し致したいと思ひます。

雅楽とは、「雅正之楽」とありまして、雅にして正しき音楽である。「正」といふことは最も重大なる問題であります。音楽といふものは己のために存在するものではない。人間は動物ではない様に、他の動物からぬき出して万物の霊長である様にと神の思召から授かつたものであります。そのため神に近づくためには正しくなければなりません。

だからその人の利益の為や個人の為にやつてゐるものではないのであります。

正しくない音楽の為に、今度の戦争の始まると同時にフランスは敗れたのであります。実際、フランスなどはもうなくなつてしまつたのでありまして東洋には仏印といふ所が有りますが、

さうでないと言へばさうでないのであります。

今フランスの敗れる直前の代表的な音曲をレコードでおきかせ致します。

〔音盤鑑賞〕

これは託児所の子供が手あたり次第に物を投げてゐる様な音楽であります。エドガーバーレス (Veres) といふ有名な作曲家の作つたものであります。何とかして自分を認められやうとして作つたものであります。作曲家第一主義といふことがヨーロッパの音楽をすたれさして行くのであると思ふのであります。大東亜音楽こそやがて世界を指導するものでないかと思ふのでありましてこゝに日本人の大きな使命が有るのではないかと思ひます。

音楽といふものは国が興るか亡びるかといふことをはかるバロメーターであります。

むかし支那の春秋戦国時代に北の方に晋といふ国があり、南の方に楚といふ国があつた。その強大な楚が大軍をひきいて晋へせめてくるといふうわさが有つたので晋の国内では非常に驚いたのであります。その時晋の国の師曠といふ男が心配はいらぬ必ず勝つと言つて、なぜなら兩國の音楽をきけばよい。南の方の歌はいけない歌である。これに反して北の歌は質実であるからと言つて「南風——南の方の音楽の風といふのであります

「不<sub>レ</sub>競」と言ふことを言つたのであります。果して楚の国の軍隊は大敗してしまつたのであります。

ところで現在のアメリカの代表的な音楽は何うかと申しますと、——現在はなかなか輸入できないのでありますが、私は非常な苦心の末やつと手に入れたのですが——非常にわるいものであります。

#### 〔音盤鑑賞〕

アメリカは極端なる機械化でありまして、アメリカはおそろく機械といふことにあまりに重きを置きすぎて魂といふことを忘れてゐるのであります。だから、機械さへ完備して居ればその戦にかつといふ考へであります。

ヨーロッパはかういふことをしてはいつかは亡びるときが来ると思はれてなりません。それを救ふものは日本ではなからうかと思はれてなりません。

幾千年の昔のものが現在の音楽になるまでには幾多の外国のものを入れてゐるのであります。それにはどんなものが入つて来てゐるだらうか。

支那には孔子廟の音楽といつて燕楽といふものがありますが、宴楽と同じ意味でありまして宴会の席に奏するもので非常に享乐的なものであります。今の支那にはこのこつてゐないのであります。清朝が満洲国へ逃げる時一緒に渡つて、今日満洲にのこ

つてゐるのであります。今それをお聞かせ致します。(。)

#### 〔音盤鑑賞〕

この中で「桜樹後庭花」なんかといふのは非常に享乐的なものであります。それが、実際に、日本へ来てゐるのであります。すがところが立派な高尚な音楽になつてゐるのであります。

支那の雅楽で、明の大祖が復活したものに越殿楽——この「殿」が正しいので、日本では「天」の字をかきますが皆これはあて字であります——といふのが有ります。

これは、宮内省の雅楽伶人の一年生の一学期、入学するとすぐ教へるもので、非常に易いものであります。膝をたゝいて教へるのであります。それに歌詞をつけて、「春の弥生の花の頃……」と私共もならつたのであります。これを「越天楽今様」といふのであります。これが後に、後白河天皇の御代ころこれを用ひられる様になり七五調の「今様」になつたのであります。

#### 〔音盤鑑賞〕

外国からの享乐的なものが入つてきて必ず襟を正さず様なものにしてしまふのであります。西洋音楽の取入れ方について支那では乾隆帝の時には五線紙を以て研究されてゐたのであります。支那に於てはとり入れ方がわるかつたので滅びたのであります。



日本は取入れ方がよかつたので正しいのがのこつてゐるのであります。

印度には火の燃える音楽 Dhikā という音楽が有りますが、命がけて唄ふとまはりから火が燃えるといふのであります。

近年になつてのことですが、或老音楽家に役人が「お前は音楽を奏して火を燃やすと云ふが、實際わしの前でやつてみよう」と命じた。それがその音楽家は娘をよんで、「わしは一生懸命唄ふからきつと火が燃えてわしを包んでしまふだらう。お前は、だから、水の音楽を唄つて呉れ」と言つた。

役人の前で一生懸命音楽をうたふとほんとうに火が燃えてその人の体を包んでしまつた。娘はお父さんが焼け死ぬと大変なので命がけて水の唄をうたつた。すると、雨がざアざア降つて来てその父の頭の上に降つて来た。娘は若くて元気が有るので、遂に焼死ななかつたといひます。ほんの近年の話であります。うそのやうだが實際有つた話だから仕方が無いのであります。今そのレコードをかけようと思ひます。

〔音盤鑑賞〕

この様に非常に熱烈なもので、このレコードを十回もかければ、ほんとうに燃えるかもしれせん。(笑声)次にお話をかへまして、俗楽について一言述べてみたいと思ひます。

その例として日本の現代の歌(長唄・浄瑠璃・謡・平家琵琶)

〔琵琶〕は仏教の影響をふくむものから出てゐる。この音楽のことを声明楽と言ふのであります。天台、真言がみな支那からまなんどとつて来たもので、日本へひろまつたのは支那から伝はつて来たのであります。印度から支那へすぐ渡つたものではありません。印度から波斯へ渡り、そこから砂の粒のアライゴビの砂漠を通つて支那へ入つて来たのであります。

今、印度のお経と、波斯のお経と、その両者の中間の支那のお経をお聞かせ致します。

〔音盤鑑賞〕(…三枚)

それから、日本で一番お経の上手だと言はれている：〔智積〕院の：〔瑜伽教如〕といふ、八十才以上にもなる老人の坊さんが居ましたが、その人に二十人ばかりのお経の名人が最後の教へをいたゞいたのであります。——私もその時おならひ致したのですが——その方を録音したのを今お掛けしておきかせ致します。もう欠けてゐるのですが……：

〔音盤鑑賞〕

日本が大東亜戦争が始つて急いでビルマ支那印度の音楽の研究を始めたがしかしその国のよいものを必ずわすれて表面的なものだけを一寸のぞいてきてすぐ作曲してビルマの音楽だ、支那の音楽だ、印度の音楽だと称してゐるが、彼らにとつては全く迷惑至極なことであります。

日本が大東亜の各国と一心団体となつて指導せねばならないのであります。

日本は芸術に対してどんなに思てゐるか。今から約百九十年前享保十九年三月江戸の中村座に上方の女形の瀬川菊之丞といふのが、「振舞（風流相生）獅子」をやり大いに人氣があつたのでありまして毎日毎日満員であつた。ところが芝居なんてみたこともないといふ劍術の名人が、門人にさそはれて、そんなら行つて見ようかといふことになり出かけたのであります。が、鉄扇——二尺とありますがそれはあまり大袈裟ですが——をひざについて黒の紋付羽織を着黒袴をはいて芝居を見てゐたが、芝居の途中、何と思つたか、持つてゐた鉄扇をえいとばかりになげつけた。

菊之丞はあやふくさけて事なくおはつたのであります。後で菊之丞から使がやつてきて用事が有るから傍の茶屋迄来て下さいといふので、そこへ行つて見ると、菊之丞が居て、「どうしてなげられたのか。私に遺恨が有つてなげられたのですか」ときいたので、「私ははじめて会つたあなたに遺恨なぞあらうはづはありません。たゞ何かはつと思つた時はもう投げてゐたのであります。」と言つた。

そこで菊之丞は、「実は私、こちらへ来てから急（忙）がしいのにとりまぎれて、何か自分の氣にそまぬことが有り、踊つ

てゐる中にそれがふとあらはれるので、見物の方の中にそれに氣のついた方が有つたら教へをいたゞかうと思つてゐたのであります。が、はしなくも今日貴方様に丁度その時に鉄扇をなげられたので驚いたわけでございます。

それでは、私は今日、あの瞬間に新しい踊方を工夫致しましたから、明日また必ずおいで下さつて、私にすぎがあるかどうか、もしあれば鉄扇をもう一度なげていたゞきたい」と、かう申しました。

あくる日、行きましたところ、ちやんと棧敷がとつてありまして、菊之丞の踊りを見ましたが一点のすきもなかつたのであります。

このやうに日本の名人は生死の切利（刹那）に新しい芸術の手法をうみだすのであります。全く命がけの問題であります。

日本人は芸能は神より授かつたものでそのため現在この様なよいものがこつてゐるのであります。〔。〕

昔からもつてゐる魂が日本音楽をさゝえ、保つて来たのであります。これがやがて世界を救つて行くのである。それが八絛一字と言ふものだと思つてをります。

どうか、みなさん、音楽は神様からさづかつたものであるといふ考へ方で兄弟の大東亜を指導して大東亜音楽をうちたてる様努力されたいと希望して終りと致します。

## 注

(1) 現時点で最も網羅的な田辺の著作目録等は鈴木聖子『雅楽』の誕生 田辺尚雄が見た大東亜の響き(春秋社、令和元年一月)の基となった鈴木博士論文「科学」としての日本音楽研究…田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築(東京大学院人文社会系研究科、平成二十六年)の附録として発表された著作目録および記事・論文目録である。著作目録には田辺の著作一〇一点が、記事・論文目録には記事・論文二〇一七点が挙げられている。本稿で言及した田辺の小冊子『家庭と音楽』(社会教育協会、昭和五年十二月)や『日本の音楽』(社会教育協会、昭和六年十二月)、論文「文化・教育及厚生政策論一」(日本国家科学大系)第一巻、実業之日本社、昭和二十年二月)など欠落している文献も散見されるが、本稿を執筆するに当たりこれらの目録より多くの教示を受けた。

(2) 前掲注1で言及した鈴木博士論文を除けば、田辺尚雄を対象とした最近の研究としては田辺が行ったアジア・沖縄音楽調査に焦点を当てた「田辺尚雄によるアジア・沖縄の民族音楽調査―録音テクノロジーの発達を視点として―」(高知大学教育学部研究報告)第八一号、令和三年三月)をはじめとする高橋美樹による論文等があるが、本稿で対象とした田辺の日本音楽論に論及した研究として次のような文献がある。①石嶺葉子「田辺尚雄と兼常清佐―その相反する両者の音楽研究姿勢について」(沖縄県立芸術大学紀要)第一五号、平成十九年、②上野正章「日本音楽を評価する試みについて」(大阪大学大学院文学研究科紀要)第四七号、平成十九年、③植村幸生「『東洋音楽』という夢―解題にかえて」(田辺尚雄著・植村校注『東洋音楽史』、東洋文庫八五六、平凡社、平成二十六年)。

(3) 本稿で中心的に取り扱う日本文化講義をはじめとする教学刷新事業を担当したのは文部省思想局であったが、昭和十二年七月に中央官庁に準ずる外局として教学局が設置され、日本文化講義は教学局の所管となった。しかし、昭和十七年十一月に行政簡素化のため、教学局は文部省の内局に改編された。本稿ではこのような経緯を踏まえ、日本文化講義などの教学刷新事業を所管する官庁を指す言葉として「文部当局」という表記をしばしば用いる。

(4) これまでに日本文化講義を取り上げた研究としては次のようなものがある。①中村治人「(史料) 日本文化講義に関する通牒と実施要綱―名古屋大学経済学部所蔵「日本文化講義」関係史料について」(名古屋大学史紀要)第八号、平成十二年)、②

古畑徹「七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義―金沢大学医学部所蔵金沢医科大学資料から―」（『北陸史学』第五一号、北陸史学会、平成十四年）、③中村治人「日本文化講義講師柳田国男―高等教育史における柳田学の足跡について―」（『柳田国男研究論集』第三号、柳田国男の会、平成十六年）、④大蔵真由美「アジア・太平洋戦争期における日本文化講義の実施に関する研究―名古屋高等商業学校を対象として―」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要『教育科学』、第六一巻第一号、平成二十六年）。

なお、日本文化講義に関する拙稿は次の七点である。①「戦時期の『日本文化講義』と経済学者」（『大阪工業大学紀要』第五八巻第二号（人文篇）、平成二十六年二月）、②「講師一覧からみた戦時期の『日本文化講義』の諸相」（同第六〇巻第一号、平成二十七年九月）、③「戦時期の私立大学における『日本文化講義』の展開―関西の私立大学を中心に―」（同第六一巻第一号、平成二十八年九月）、④「『中外日報』紙に見る戦時期の『日本文化講義』」（同第六二巻第一号、平成二十九年九月）、⑤「戦時期の私立大学に見る『日本文化講義』への対応―東京圏の私立大学を中心に―」（同第六四巻第一号、令和元年九月）、⑥「大倉邦彦と『日本文化講義』―在野の教学刷新実践者とその思想善導講義―」（『大倉山論集』第六七輯、令和三年三月）、⑦「神宮皇學館大学と『日本文化講義』―戦時期教学刷新事業の一断片―」（『皇學館大学研究開発推進センター紀要』第八号、令和四年三月）。このうち①～⑤については皇學館大学の学術リポジトリで、⑥については公益財団法人大倉精神文化研究所のホームページで、⑦については皇學館大学の学術リポジトリで、いずれもPDFファイルにて閲覧が可能である。

- (5) これら十六名と担当回数は次の通りである。山田孝雄（五十二回）、池崎忠孝（三十五回）、本多光太郎（三十三回）、伊東忠太・高田保馬・松井元興（三十回）、田辺尚雄（二十八回）、永井松三（二十六回）、紀平正美（二十二回）、久松潜一・川村多実二・米田実（二十一回）、金子大栄・柳田国男・塩崎温・大串兔代夫（二十回）。

- (6) 内閣情報部長・横溝光暉が昭和十四年九月二十七日に東京音楽学校で「思想戦ト音楽」という演題にて日本文化講義を担当しているが、それ以外に音楽をテーマとして日本文化講義を担当した者は現時点で田辺を措いて確認できていない。

- (7) 本稿では引用に当たり、原文における漢字の旧字体は新字体に変更して表記した。引用文中で明らかに誤字と思われる字については上部に「ママ」と付し、直後に「〔 〕」付きで正字を補した。また、脱字と思われる箇所には「〔 〕」付きで字を補した。

- 引用部分の「/」は改行を、「……」は中略を示す。なお、引用部分には現在の社会通念上不適切な表現もあるが、原文のままとした。
- (8) 教学刷新事業が実施されていく背景については前掲注4で掲げた拙稿「大倉邦彦と『日本文化講義』」在野の教学刷新実践者とその思想善導講義」を参照されたい。
- (9) 本稿では学生新聞からの引用に当たっては次の復刻版・縮刷版を利用した。『帝国大学新聞』（復刻版、不二出版、昭和五十九～六十年）、『京都帝国大学新聞』（縮刷版、京都大学新聞社、昭和四十四年）、『一橋新聞』（復刻版、不二出版、昭和六十二年～平成元年）。また、『神戸高工新聞』からの引用に当たっては神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ内の大学文書史料室デジタルアーカイブに収録されているファイルを利用した ([https://dai.lib.kobe-u.ac.jp/da/sc/search/00199005003/?lang=0&cate\\_schema=4000&mode=0](https://dai.lib.kobe-u.ac.jp/da/sc/search/00199005003/?lang=0&cate_schema=4000&mode=0)、令和四年十月十日閲覧)。
- (10) 結局、東京帝大は昭和十一年度については日本文化講義の実施を見送り、翌十二年度から実施した。このことについては前掲注4で掲げた拙稿「戦時期の『日本文化講義』と経済学者」を参照されたい。
- (11) 山田栄「昭和十一年教育界の回顧」東京文理科大学教育学会編輯『教育学研究』第五卷第一〇号、宝文館、昭和十二年一月、一六六～一六七頁。
- (12) 前掲注11山田「昭和十一年教育界の回顧」一一六九頁。
- (13) 文部省思想局『日本精神論の調査』思想調査資料特輯、昭和十年十一月、一頁。
- (14) 前掲注13文部省思想局『日本精神論の調査』五頁。
- (15) 田辺尚雄「日本音楽の理論 附粋の研究」『哲学雑誌』第二四卷第二六四号、哲学会、明治四十二年三月、一六七～一六八頁。
- (16) 田辺尚雄「日本音楽の特質」『邦楽』第四卷第一号、邦楽社、大正七年一月、三二～三三頁。
- (17) 前掲注16田辺「日本音楽の特質」三六頁。
- (18) 田辺尚雄「日本音楽講話」岩波書店、大正八年十月、三五〇頁。
- (19) 前掲注18田辺「日本音楽講話」三五～三五二頁。

- (20) 前掲注18田辺『日本音楽講話』三五二～三五三頁。
- (21) 田辺は大正十五年十一月に『日本音楽講話』の改訂版を岩波書店より刊行するが、一部の字句の修正はあるものの日本音楽の批評については大正八年十月刊行の初版と内容に大きな変更はない。
- (22) 田辺尚雄『家庭と音楽』婦人講座第九篇、社会教育協会、昭和五年十二月、二三頁。
- (23) 前掲注22田辺『家庭と音楽』三〇～三二頁。
- (24) 田辺尚雄『日本の音楽』婦人講座第二二篇、社会教育協会、昭和六年十二月、一五頁。
- (25) 前掲注24田辺『日本の音楽』一六～一七頁。
- (26) 前掲注24田辺『日本の音楽』六二頁。
- (27) 『都山流楽報』は中尾都山(本名・中尾琳三)が明治二十九(一八九六)年に興した尺八の流派「都山流」の会報誌であり、大正三(一九一四)年四月に創刊された(昭和四十年五月に『楽報』と改称)。田辺は都山流の流祖・中尾と交流が深く、昭和三年六月の第二二九号から昭和五十六年七月の第六六七号まで三二六回にわたり同誌に「天山荘楽談」を連載していた。二人の交流については後掲注65の『続田辺尚雄自叙伝』(大正・昭和篇)(昭和五十七年十二月)が詳しい。なお、流祖・中尾の評伝として森田柁山『中尾都山伝―知られざる流祖の魅力』(公益財団法人都山流尺八楽会、令和三年四月)が刊行されている。同書の中でも注での言及ではあるが、田辺が「都山と終生交流が深かった」(三三頁)と記されており、田辺が「玲琴奏者として都山流の演奏会によく出演して」(二三四頁)いたことなど田辺と中尾の交流を知ることができる。
- (28) 田辺尚雄「天山荘楽談(七十五)」『都山流楽報』第三一一号、中尾琳三、昭和十年四月、七頁。
- (29) 田辺尚雄「日本音楽の研究」『音楽叢書』第一編、京文社、大正十五年二月、一〇頁。
- (30) 田辺尚雄「日本音楽の本質」『日本精神講座』第二卷、新潮社、昭和八年十二月、二二五頁。
- (31) 前掲注30田辺「日本音楽の本質」二三二頁。
- (32) 前掲注30田辺「日本音楽の本質」二三二頁。
- (33) 田辺尚雄「楽曲と日本国民性『上』」『調査時報』第三卷第二号、日本放送協会、昭和八年十一月、五頁。

- (34) 前掲注33田辺「楽曲と日本国民性」上」五頁。
- (35) 前掲注33田辺「楽曲と日本国民性」上」五頁。
- (36) 田辺尚雄「日本音楽の精髓」『教育研究』第四一三号、初等教育研究会、昭和九年一月、五八頁。
- (37) 田辺尚雄「音楽と教化」民衆文庫第一〇四篇、社会教育協会、昭和十年十月、一頁。
- (38) 前掲注37田辺「音楽と教化」一七頁。
- (39) 前掲注37田辺「音楽と教化」二六頁。
- (40) 前掲注37田辺「音楽と教化」三一頁。
- (41) 前掲注37田辺「音楽と教化」三三頁。
- (42) 前掲注37田辺「音楽と教化」三四頁。
- (43) 田辺尚雄「東洋音楽の長所」東亜民族文化協会編『東亜文化論集』、東亜民族文化協会、昭和十年十二月、六九頁。
- (44) 前掲注43田辺「東洋音楽の長所」六九頁。
- (45) 田辺尚雄「日本精神と音楽」文部省社会教育局編「国民精神作興叢書」第八輯、文部省、昭和十三年三月、一―二頁。
- (46) 前掲注45田辺「日本精神と音楽」六頁。
- (47) 前掲注29田辺「日本音楽の研究」一頁。
- (48) 前掲注28田辺「天山莊楽談（七十五）」一〇頁。
- (49) 田辺はこの他にも『都山流楽報』で日本精神について論じている。例えば同誌第三一五号（昭和十年八月）に寄せた「天山莊楽談（七十八）」の〔15〕極端なる二つの日本音楽論』では兼常清佐の所論を批判し、「洋楽を好む者も邦楽を愛する者も共に日本精神を離れぬやうにし、両者共に感覚的な低級なものを斥けて、高い深い霊的なものを求め」（八頁）るべきだと洋楽対邦楽の問題を総括している。また、同誌第三三九号（昭和十二年八月）所収の「天山莊楽談（九十九）」の〔192〕時局と音楽家 享楽主義は動物性』では「我が国民音楽は日本精神の発現である。日本精神文化のパロメーターである」（一〇頁）と述べ、音楽者が国家社会に極めて必要な音楽を以て戦争をしているということをよく了解すべきだと説いている。

- (50) 田辺尚雄「天山莊楽談（百五）」『都山流楽報』第三四六号、中尾琳三、昭和十三年三月、八頁。
- (51) 田辺尚雄「国民音楽の指導性」社会教育研究会編『社会教育』第一〇卷第一〇号、社会教育協会、昭和十四年十月、一五頁。
- (52) 田辺尚雄「日本音楽の真髓」教学局編纂『教学叢書』第八輯、内閣印刷局、昭和十五年三月、一〇二頁。
- (53) 前掲注52田辺「日本音楽の真髓」一〇四頁。
- (54) 田辺尚雄「文化戦争と日本音楽」『興亜』第四卷第六号、大日本興亜同盟、昭和十八年六月、四九頁。
- (55) 前掲注54田辺「文化戦争と日本音楽」五三頁。
- (56) 前掲注54田辺「文化戦争と日本音楽」五四頁。
- (57) 田辺尚雄『神祇と音楽』敬神思想普及資料一五、神祇院、昭和十九年七月、一頁。
- (58) 神祇院は昭和十五年十一月に内務省の外局として設置された行政組織であり、国家神道による国民教化を推進する役割を担っていた。「敬神思想の普及と昂揚に資すると共に、神祇に関する正しき認識を得しむる目的を以て編輯するところなり」と見返しに書かれている「敬神思想普及資料」には田辺の他に山田孝雄、大倉邦彦、河野省三、田崎仁義、久松潜一といった日本精神論と関係の深い人物が執筆していた。
- (59) 前掲注57田辺『神祇と音楽』七〇頁。
- (60) 前掲注57田辺『神祇と音楽』七六〜七七頁。
- (61) 田辺尚雄「天山莊楽談（百十三）」『都山流楽報』第三九二号、中尾琳三、昭和十七年一月、二頁。
- (62) 前掲注61田辺「天山莊楽談（百十三）」三頁。
- (63) 安岡の講演録は財団法人啓明会より昭和七年七月に第四十四回講演集として発行された。
- (64) 前掲注13文部省思想局『日本精神論の調査』三九頁。
- (65) 田辺尚雄先生百歳・文化功労者祝賀実行委員会編『統田辺尚雄自叙伝』（大正・昭和篇）、邦楽社、昭和五十七年十二月、二八五頁。
- (66) 田辺尚雄『音楽美の世界——音楽を愛する人々の教養』日本教文社、昭和二十六年四月、一八八頁。



- (67) 初出は『人間の真理』第二七卷第一一〇号、明玄書房、昭和五十五年十一月。
- (68) 田辺尚雄『隨筆集 音の響き』明玄書房、昭和五十六年六月、一二四頁。
- (69) 前掲注68田辺『隨筆集 音の響き』一二四頁。
- (70) 前掲注1で言及した『(雅楽)の誕生 田辺尚雄が見た大東亜の響き』で鈴木聖子は「東洋音楽」と「東亜音楽」という言葉に関し田辺が行った講演「東洋音楽の長所」(東亜民族文化協会「東亜文化論集」東亜民族文化協会、昭和十年十二月)を引き、「田辺が極めて「東洋」と「東亜」の使い分けに意識的であったことが分かるだろう」(二五五頁)と述べている。また、田辺も昭和二十年二月の論文「音楽文化政策論」(『日本国家科学大系』第一卷「文化・教育及厚生政策論(一)」、実業之日本社)の中で音楽文化研究所の設置に関して論じた際に同研究所内に置く東洋音楽研究部について「東洋と言へば日本を含まず。日本と東洋とを併せ含めば之れを東亜と称する」(傍点は原文、一七頁)と述べており、東洋と東亜を区別していた。しかし、日本文化講義の演題選定については東洋と東亜の区別にさほど意識的ではなかったと見られる。
- (71) 東京高等工芸学校に関する資料として唯一確認できた『東京高等工芸学校一覽』(昭和十二年度)の「学年歴」や「沿革略」には日本文化講義に関する記載はなかった。
- (72) 『講演記事／公演係りから』『理学部会誌』第一六号、東京帝国大学理学部会、昭和十二年十二月、一〇七頁。
- (73) 記事には次のように書かれていた。
- 本学に於ては国民精神総動員運動実行の具体案として学生に時局の重大性並びに局認識を徹底させるため本学として主として學術的方向をとり、政治、經濟、軍事その他各方面の専門家を学生課及び各学友会が主体となつて選択しその強化を主眼とする学生の教養一般の向上を計ることに決定し更に時局講演会開催と並行して映画を活用、ニュース映画を初め有意義な記録映画を続々上映し積極的に時局認識の徹底強化策に資することとなつた。尚日本文化講義は今春來數回に亘つて行はれてゐるが今後は時局認識に重点を置き講義題目、講師は凡てこの基幹に副ふて採択することにより時局性を鮮明化することとなつた。
- (74) 記事中の「東大教授工学博士」という田辺の肩書きは誤っており、正しくは「東大講師・理学士」である。

(75) 室蘭高工は日本文化講義の講義録を『日本文化講義』という小冊子にまとめ第九輯まで発行した。これらの講義録は室蘭工業大学附属図書館に所蔵されており、同館での閲覧が可能である。田辺の講義録を取めた『日本文化講義』第四輯の見返しには「本書は本校に於ける日本文化講義の昭和十六年度第一回の催しとして昭和十六年六月三十日日本校寄宿舎に於て田辺尚雄氏が講演せられしものを録したるものなり」とある。奥付の発行所は室蘭高等工業学校生徒課となっているが、印刷・発行の日付けは記されておらず、「教学局蔵版 発行部数六五〇部配付範囲校内」と括弧書きで記されている。

(76) 田辺はこの講義をはじめ論文などでもしばしば芳沢あやめに関する挿話としてこの話を盛り込んでいるが、田辺自身が「共栄園音楽文化工作」(『東亜文化圏』第一巻第七号、青年文化協会東亜文化圏社、昭和十七年八月)でこれまでの発表で名前を誤っていたことを認め、以後は瀬川菊之丞の挿話として紹介している。なお、『隨筆集音の響き』の「絶妙の名人芸」でも田辺はこの話をしているが、そこでは昭和十年頃に入手した話でありながら出所不明となったということを書いている。

(77) 田辺の大東亜音楽への言及については前掲注1で触れた鈴木聖子(『雅楽』)の誕生田辺尚雄が見た大東亜の響き』の「第八章雅楽」(『大東亜音楽』として万邦斉しく仰ぎ見るもの)が詳しい。ただし、同書で鈴木は「田辺が初めて『大東亜音楽』という言葉を用いるのは、一九四一年七月の『大東亜に於ける日本の音楽の位置』(『日本音楽』創刊号)であると思われる」(二六〇頁)と推測した上で、時系列的に田辺の著作から大東亜音楽に関する言説を引きながら立論しているが、この推測は明らかに誤りである。鈴木が指摘する通り田辺は確かに論文「大東亜に於ける日本の音楽の位置」の中で日本音楽発達史の時代区分について第四期の期間を「明治維新から昭和十六年十二月七日までの期間」としているが、そもそも一九四一(昭和十六)年七月に発表した論文でこれよりも時間的に後のこととなる「昭和十六年十二月七日まで」という時代区分を設定できるはずがない。田辺がこの論文を執筆した『日本音楽』創刊号は鈴木の記事にある「一九四一年七月」ではなく昭和十九(一九四四)年七月の刊行である。現時点で筆者が確認している限りでは、田辺が大東亜音楽という言葉を最初に用いたのは断言できないものの昭和十七年三月の「大東亜と音楽」(『教学叢書』第二二輯)であると見られる。

(78) 平泉澄と山田孝雄の日本文化講義については前掲注4で掲げた拙稿「神宮皇學館大學と『日本文化講義』―戦時期教学刷新事業の一断片」を参照されたい。また、大倉邦彦の日本文化講義については同じく拙稿「大倉邦彦と『日本文化講義』―在野の

教学刷新実践者とその思想善導講義」を参照されたい。

- (79) 田辺尚雄「序」吉川英士『日本音楽の性格』わんや書店、昭和二十三年三月、序四頁。
- (80) 田辺尚雄「天山莊楽談（百廿九）」『都山流楽報』第三八七号、中尾琳三、昭和十六年八月、五頁。
- (81) 前掲注81田辺「天山莊楽談（百廿九）」七頁。
- (82) 『日本文化講義』第四輯、二七頁、室蘭高等工業学校生徒課、発行年月日未記載。
- (83) 田辺尚雄『雅楽通解』五三頁、古曲保存会、大正十年二月。
- (84) 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史二』名古屋大学出版会、平成元年十月、四二六頁。なお、この項目の執筆者は永井義雄である。
- (85) 田辺尚雄『日本音楽概説』学生文庫第五、河出書房、昭和十五年六月、序一～二頁。
- (86) 田辺尚雄「田辺尚雄思い出ばなしその22 世界教育会議」『季刊邦楽』第二二号、邦楽社、昭和五十五年三月、一三四～一三六頁。
- (87) 前掲注65『続田辺尚雄自叙伝』四九二～四九三頁。
- (88) 田辺尚雄「天山莊楽談（百十六）」『都山流楽報』第三六〇号、中尾琳三、昭和十四年五月、三三頁。
- (89) 前掲注88田辺「天山莊楽談（百十六）」四～五頁。
- (90) 前掲注88田辺「天山莊楽談（百十六）」六頁。
- (91) 民音音楽博物館は令和三年二月十五日より施設改修工事にとまなう長期休館に入っていたため、本稿の脱稿までに同館で閲覧することが叶わなかった。
- (92) 速記録の性格上、適切な段落分けがなされていないため、読みやすさを考慮し、当方で適宜段落分けを行った。また、速記を担当した生徒が正確に聞き取れなかったと見られる部分については（ ）を付け補足した。